

富山県 婦中町

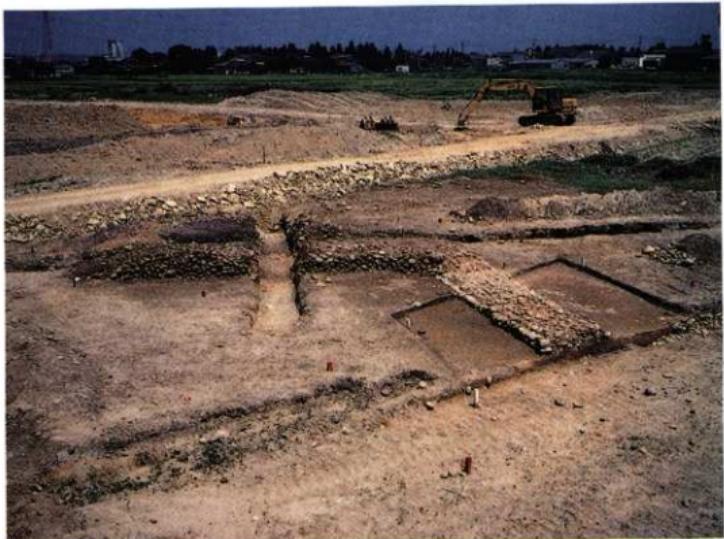
堀Ⅰ遺跡 発掘調査報告

1996年3月

婦中町教育委員会

『堀 I 遺跡』正誤表

ページ	行	誤	正
29	第4表左側17行目	14C前半～15C後半	13C中頃～14C代



調査区全景（南から）



調査区全景（真上から）

序

婦中町熊野地区にある堀 I 遺跡は、神通川と井田川に挟まれた広々とした水田地帯にあります。この一帯では、広域にわたり県営公害防除特別土地改良事業による汚染田の復元工事が行われてきました。当教育委員会ではそれに先んじ、埋蔵文化財の調査を進めて来ており、今回の堀 I 遺跡の調査もその一つにあたります。

試掘調査では、塚状遺構に中世の藏骨器が密集して埋められていたのが確認されました。これは県内でも稀なものであり、今後の研究の手がかりになる貴重な資料であると判断されたため、当教育委員会ではこの塚状遺構を保存・整備することに致しました。

遺跡周辺の地域は、熊野神社を取り囲むようにして遺跡群が密集しており、古来より隆昌していた地域として考えられています。今後周辺地域の調査が進むにつれ、堀 I 遺跡はそれらを考察する上で、一層重要な遺跡として位置づけられるでしょう。

本書は今後の調査研究の参考資料として、また文化財の保護と郷土の歴史を理解するための一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査にご協力頂きました地元の皆様をはじめ、関係各位に深く感謝を申し上げます。

平成 8 年 3 月

婦中町教育委員会

教育長 清水信義

例　言

- 1 本書は、富山県婦負郡婦中町堀字立寺町地内に所在する堀I遺跡の埋蔵文化財調査報告である。
- 2 調査は県営公害防除特別土地改良事業（神通川第3次地区）の実施に先立ち、富山県農地林務部富山農地林務事務所の依頼を受けて婦中町教育委員会が実施した。
- 3 調査期間・面積は次のとおりである。

調査期間　試掘調査 平成7年5月11日～6月9日（延5日間）

本調査 平成7年7月17日～10月12日（延50日間）

調査面積　試掘調査 対象面積 約100m² 発掘面積 61m²

本調査 発掘面積 約83m²

- 4 調査体制は以下のとおりである。

調査担当者 婦中町教育委員会 生涯学習課 文化財保護主事 片岡英子

調査事務局 婦中町教育委員会 生涯学習課 課長 平井光雄

婦中町教育委員会 生涯学習課 文化振興係長 見波重尋

なお、作業員の確保については、婦中町シルバー人材センターの協力を得た。

- 5 資料の整理、本書の編集と執筆は、調査担当者がこれに当たった。

- 6 調査期間中および資料整理期間中、次の方々から御教示・御協力を頂いた。記して謝意を表したい。（敬称略五十音順）

池田恵子・越前慶祐・大野淳也・岡本淳一郎・狩野聰・久保尚文・酒井重洋・島田美佐子・高梨清志・西井龍儀・宮田進一

- 7 本書の挿図・写真図版の表示は次のとおりである。

方位は真北、水平基準は海拔高である。

遺構の表記は次の記号を用いた。溝：SD

- 8 出土品および記録資料は、婦中町教育委員会が保管している。

- 9 発掘調査・整理参加者は次のとおりである。

生田寿美子・中坪千春・中林隆典（発掘・整理作業員）

海道雅子・大平奈央子・堀内大介・野水晃子・山崎雅恵・景山和也・勾坂友秋・田中慎太郎（調査・整理補助員）

本文目次

序 文	V	まとめ	19
例 言	1 堀 I 遺跡について	19	
目 次	(1) 遺構	20	
I 遺跡の位置と環境	(2) 遺物	21	
II 調査の経緯と経過	(3) 変遷	21	
1 調査に至る経緯	(4) 堀 I 遺跡についての検討	21	
2 平成 7 年度試掘調査の概要	2 中世墓について	22	
(1) 概況と層序	(1) 中世墓の形態	22	
(2) 遺構	① 中世墓の形態分類	22	
(3) 遺物	② 特殊な墓形態	22	
III 調査の概要	③ 蔵骨器	23	
1 本調査の経過	④ 被葬者の階層と墓形態	23	
2 座標軸の設定	(2) 中世墓の変遷	24	
3 概況と層序	① 墓形態の変遷	24	
4 遺構	② 墓地の立地の変遷	26	
(1) 下層	③ 北陸地方の中世墓の変遷の分期	26	
(2) 上層	おわりに		
5 遺物	参考文献		
	写真図版		

挿図目次

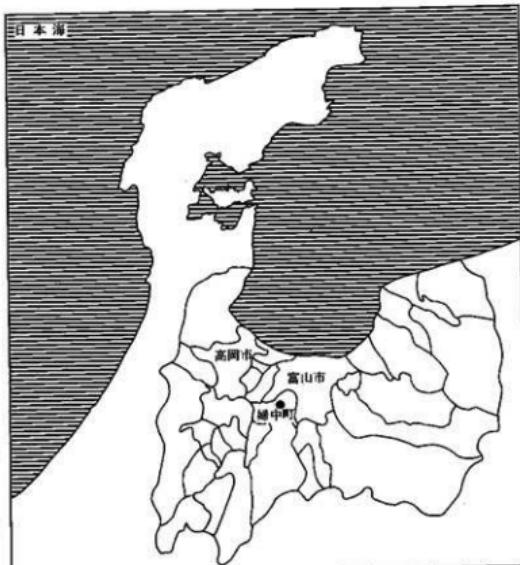
第 1 図 堀 I 遺跡の位置	第 12 図 平面図
第 2 図 周辺の遺跡分布図と遺跡一覧	第 13 図 土層断面図
第 3 図 調査対象範囲と区割図	第 14 図 本調査出土遺物実測図
第 4 図 堀状遺構土層断面図	第 15 図 変遷推定図 (A の場合)
第 5 図 試掘調査出土遺物実測図	第 16 図 形態分類別墓地検出例
第 6 図 試掘調査出土遺物実測図	第 17 図 形態分類別墓地検出例
第 7 図 石造物実測図	
第 8 図 基本層位模式図	第 1 表 中世墓の主な形態パターン
第 9 図 遺構配置推定図	第 2 表 北陸地方の墓分類別存続期間
第 10 図 道盛土検出状況平面図	第 3 表 墓分類別立地状況
第 11 図 道石敷検出状況平面図及び立面・断面図	第 4 表 主な中世墓一覧

I 遺跡の位置と環境

婦中町は富山県の中央部にあり、北側・東側は県庁所在地の富山市と、西側は小杉町・砺波市と、南側は八尾町と接している。

町の地形は、おおむね西側の丘陵部と東側の平野部に二分される。丘陵部は県中央部に南北に連なる呉羽丘陵から射水丘陵を経て、南の牛岳へと連なっている。一方、平野部は神通川とその支流である井田川が形成した扇状地が広がり、富山平野へと続いている。

本書で報告する堀I遺跡は、富山県婦負郡婦中町堀字立寺町地内に所在し、神通川と井田川に挟まれた微高地に位置する。本遺跡は、東西2地区に分かれ、今回調査対象となったのは東部地区である。両地区的現況は、西部は田、東部は田・塙状造様・石敷道である。周辺は、水田地帯が広がり、遺跡から一番近い集落まで約200mある。



第1図 堀I遺跡の位置

ところで、婦中町は、旧村の区画により朝日・鶴坂・速星・熊野・宮川・古里・神保・音川の8地区に分けられる。堀I遺跡はこのうち熊野地区に入るが、この名は周辺に鎮座する熊野神社に由来するといわれている。婦負郡には「延喜式」に記載されている神社が七箇所あるが、熊野神社もその一つである。当神社は、伝承によると久寿二年（1155）、立山山麓の五智山円福寺が光明坊のときに萩の島に移り、為成郷十八ヶ村の惣社となつた。歴代の住僧が熊野神社の別當職として奉仕し、光明山來迎寺と寺号を改めた後、富山市に移つた。その後は、坪野村の豪農若林源左衛門に奉齊が命ぜられた。源左衛門は佐伯有基の子孫であるともいわれ、現在に継承される稚児舞はこの頃に遡るといふ。

遺跡近隣には中名I・II・V・VI遺跡、持田I遺跡、清水島II遺跡、道場I・II遺跡など、古代・中・近世の遺跡が密集している。これらの遺跡は全て、平成5年度以降に、県営公害防除特別土地改良事業に先立つ分布調査及び試掘調査によって発見されたものである。そのうち中名II遺跡と清水島II遺跡では平成6・7年度に発掘調査が実施されており、中近世の集落が確認されている。これらの遺跡群は熊野神社がある中名・道場地区に特に集中しており、この一帯は古くから栄えてきた地域と推定される。堀I遺跡は、中名・道場地区と清水島地区のほぼ中間地点に位置し、上述した集落遺跡群とは少し距離を置いている。

町内のその他の周辺遺跡としては、北方に砂子田I遺跡（古墳～古代・中世）、袋遺跡（古代）などがあり、多くの遺物が採集されている。一方、神通川や井田川の氾濫源となっていた西方・東方には、遺跡は存在しないようだ。

なお、富山市の神通川右岸地域には、吉倉A・B遺跡、南中田D・任海遺跡などの古代から中世に至る遺跡がある。これらの遺跡のなかには莊園に関係する集落と考えられるものもあり、これまでの研究で一帯は慈大寺家領宮河庄の領域であったと考えられている。また中世には、婦中町側の神通川左岸地区も、この宮河庄の範囲に取り込まれていたと推定されており（久保1996）、堀I遺跡周辺の一帯もこの影響を受けていた可能性があろう。



No.	遺跡名称	種別	時代	9	持田Ⅰ遺跡	集落	古代・中世・近世
1	堀Ⅰ遺跡	墓	中世・近世	10	砂子田Ⅰ遺跡	散布地	古墳・古代・中世
2	清水島Ⅱ遺跡	集落	中世	11	板倉Ⅱ遺跡	散布地	古代・近世
3	中名Ⅱ遺跡	集落	中世	12	板倉Ⅰ遺跡	散布地	近世
4	中名Ⅰ遺跡	集落	古代・中世	13	増田Ⅰ遺跡	散布地	近世
5	中名Ⅴ遺跡	集落	中世・近世(一部古代?)	14	下轡田Ⅰ遺跡	散布地	中世・近世
6	中名Ⅵ遺跡	集落	古代・中世	15	上轡田Ⅰ遺跡	散布地	近世
7	道場Ⅰ遺跡	集落	中世・近世	16	塚原Ⅰ遺跡	散布地	中世
8	道場Ⅱ遺跡	集落	中世・近世	17	袋遺跡	散布地	古代

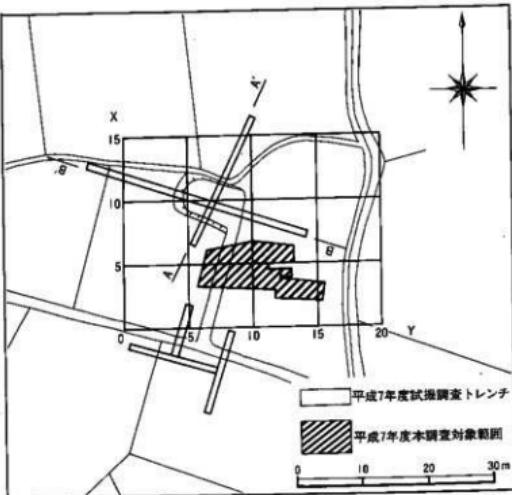
第2図 周辺の遺跡分布図 (1/20000)と遺跡一覧

II 調査の経緯と経過

1 調査に至る経緯

昭和49年、カドミニウム汚染田の復元を目的に、県営公害防除特別土地改良事業が策定された。鳩中町の神通川流域においても、この事業が3次に分けて進められることになった。そこで工事に先立ち、工事予定区内における遺跡の調査が必要となった。まずは分布調査を進めたところ、第3次地区において遺跡推定地がいくつも確認された。堀I遺跡もこの時に発見された遺跡の一つである。

本遺跡一帯は、平成5年11月26日に実施した分布調査により、遺跡立地推定地とされた。推定根拠は、1点のみではあったが中世土器が採集されたこと、五輪塔の残欠が残る塚状の遺構が確認されたこと、その他小字名（寺屋敷・立寺町）や地形観察などによる。翌年の平成6



第3図 調査対象範囲と区割図 (1/800)

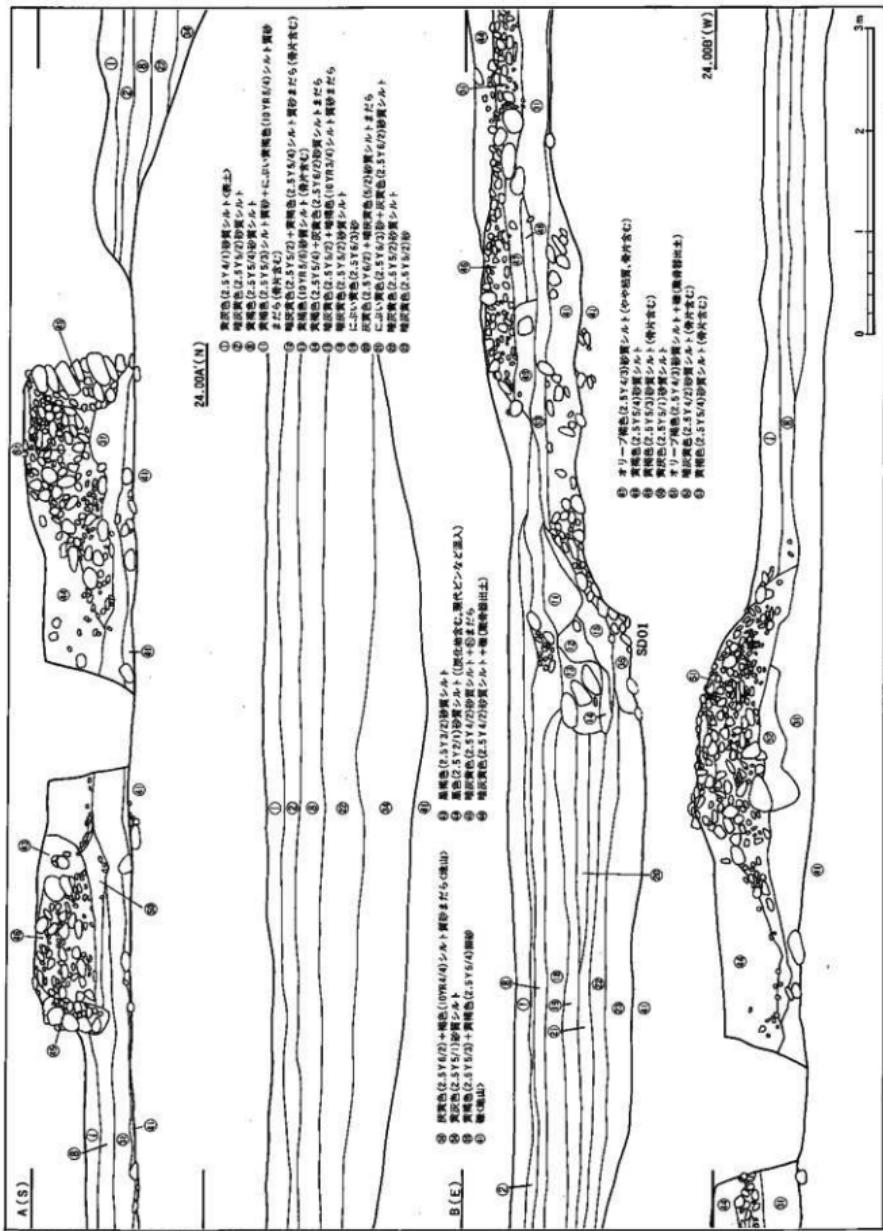
年3月には、この地域に試掘調査を実施した。調査では、17haの対象地区内に、幅約1mのトレンチを31本設定した。その結果、西側で集石遺構を確認した。遺構からは炭化物・骨片・近世の骨壺が出土し、近世墓と推定された。また、この調査では、塚状遺構は掘削せず、その周辺の試掘にとどまった。この時の調査では、周辺に遺構と断定できるものが確認されず、塚状遺構を囲む石積みも年代があまり遡らないものと思われた。また、地元の方の話により、この場所は昭和37年まで火葬場として利用されていたことが分かったため、この遺構は近現代の火葬場の墓壙と推定していた。しかし、平成7年5~6月に実施した塚状遺構及びその周辺の試掘調査の結果、塚状遺構には中世の蔵骨器が密集して埋められていることが分かった。これだけの蔵骨器がまとまって発見されたのは県内でも稀な例であることから、塚状遺構を中心とした地区を工事対象から除外し、保存・整備することになった。同年7月17日~10月12日に、工事対象区域のうち、田面の高さの調整ができなかった場所においては、本調査を行った。

2 平成7年度試掘調査の概要

(1) 概況と層序

塚状遺構は、火葬場廃絶以後荒れ地と化しており、北側の石積みは水田の用水路の壁として利用されていた。

平成7年度に実施した塚状遺構およびその周辺の試掘調査では、幅約1mのトレンチを5本設定し、遺存状態を確認した。塚状遺構には十字にトレンチを入れ、内部の遺物の存在と層序を確めた。その後、外表面を精査して積石状況等を観察した。一帯の基本的層序は、上から順に第1層：黄灰色砂質シルト、第2層：暗灰黄色砂質シルト、第8層：黄褐色砂質シルト、第31層：灰黄色+褐色シルト質砂まだら、第41層：疊となる（第3章第8図参照）。塚状遺構は第8層もしくは第31層直上に造られている。南側・西側では地表面から30~60cmの深さで地山の疊層となる。北側・東側では旧地形が落ち込んでいた。塚状遺構の20m南でも同様の落ち込みが確認され、平成6年度の試掘調査結果も考え合わせると、一帯には旧河道が幾条も通っていたものと考えられる。



第4圖 塚状造構土層断面図 (1/50)

(2) 遺構

塚状遺構は、東西に長い長方形を呈し、方位は長軸が西に対して約25°北に傾く。規模は、長軸約9m・短軸約7mを測り、頂部と裾部の比高差は南東では殆どないが、北西にいくほど大きくなり最大で110cmを測る。マウンドは、疊を多量に含んだもろい土（第51層）を60~80cmの厚さに盛って造られている。Bトレンチ東側では一部で第51層の下層にも骨片の混ざった層が確認された（第52層）。南西辺と北東辺には5~6段の石が積まれる。石の大きさや形は不規則で、法面は垂直か少し傾斜がつく。南東辺は緩らかに盛られており、縁辺部に石を長軸を縦にして並べている。また、南西辺から内側へ約1mの位置には、石が並んでおり、断面観察ではこの下に石が数段積んであるように見える。また、中央部には火葬場に転用された際の掘り込みが確認され、炭や現代の茶碗・瓶・ビニールなどが混入していた。掘り込みの大きさは、南北4m・東西6mに及び、地表面からの深さは最深60cmを測る。また更に、この掘り込みの埋土を切って、中世の藏骨器が埋められていた（第43層）。

Bトレンチ西側では、塚状遺構の南東端を覆うようにして盛られた砂質シルトと疊の層が確認された（46~49層）。またその更に西側には、SD01が確認された（第11~15層）。溝は幅190cm・深さ65cmを測り、東辺には長軸35cm程度の石を3段積んでいる。本調査ではその延長が検出されている。

(3) 遺物

出土した遺物には、珠洲焼・八尾焼・越前焼・瀬戸焼・中世土師器・土製品・伊万里焼・丸山焼・硯・骨片がある。藏骨器のうち、残りの良いものは中に火葬骨が入っていた。遺物は破片のものが殆どであり、ここでは器形の分かるものを載せた。なお、珠洲焼は吉岡氏の編年（1992）を八尾焼は酒井氏の分類（1994）を参考とした。

珠洲焼（1~12）

1~7は壺である。5を除き全て小型の壺R種である。口径は全て11cmである。1は器高が20cmである。肩部に緩やかな櫛目波状文が2帯施され、下段の波状文は上下をヘラでなで消して幅を一定に整えている。Bトレンチ西側に、口縁部側が西に傾いた状態で埋まっていた。その他、3・6にも櫛目波状文が施されている。1~3はⅢ期、4はⅣ期に比定できよう。また、5は壺T種で、焼き歪んでいる。脇部外面には頸部の境目まで、細かい綾杉文の叩き目をしっかりと入れる。8~12は片口鉢である。8・9・11・12は鉗し目が施され、そのうち8・9には使用痕が認められる。11の口径は29cm、12は32cmを測る。鉗し目は全体に細かめだが、9のみ鉗し目も胎土もやや粗めである。10はこね鉢で器高8cm、口径18cmを測る。13の上部で上下逆の状態で出土した。Ⅲ期のものと比定できる。

八尾焼（13~19）

13~16は小型の壺である。13は1の西側に並んで埋められ、口縁部側がやはり西に傾いていた。上部には珠洲焼片口鉢（10）と中世土師器（20）が上下を逆にした状態で出土した。16は口径16cmを測る。17・19は壺で、どちらも第2群a類に比定できる。17は壺Bで口径24cmを測る。18は鉢である。器高6cm、口径19cmで、口縁部は外反する。

中世土師器（20~22）

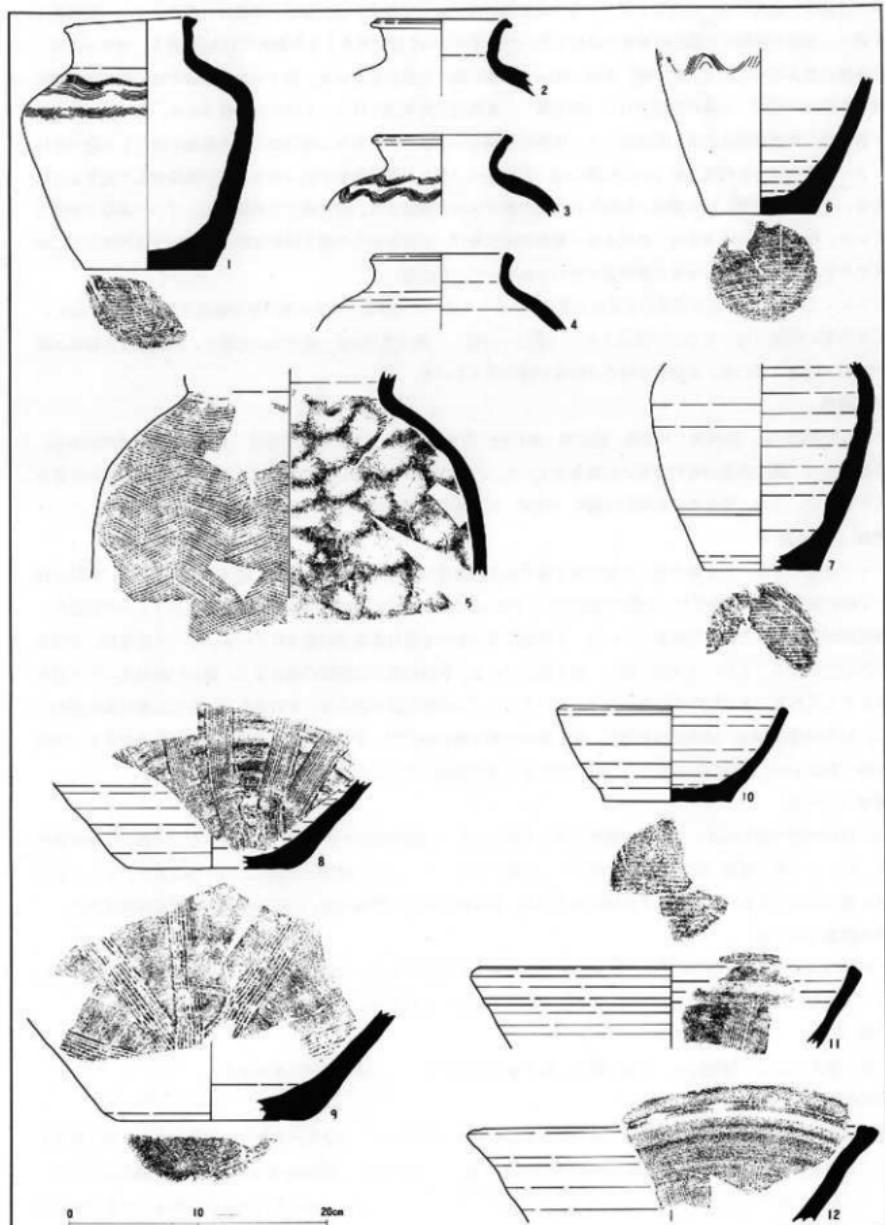
口縁部の端部が尖り、やや内湾する。器壁は薄く、胎土が緻密である。口径は7・9・12cmに分かれる。20は18の上部で上下逆の状態で出土した。20は器高が深く帰属年代は13世紀後半、その他は14世紀代のものである。

瀬戸焼（23）

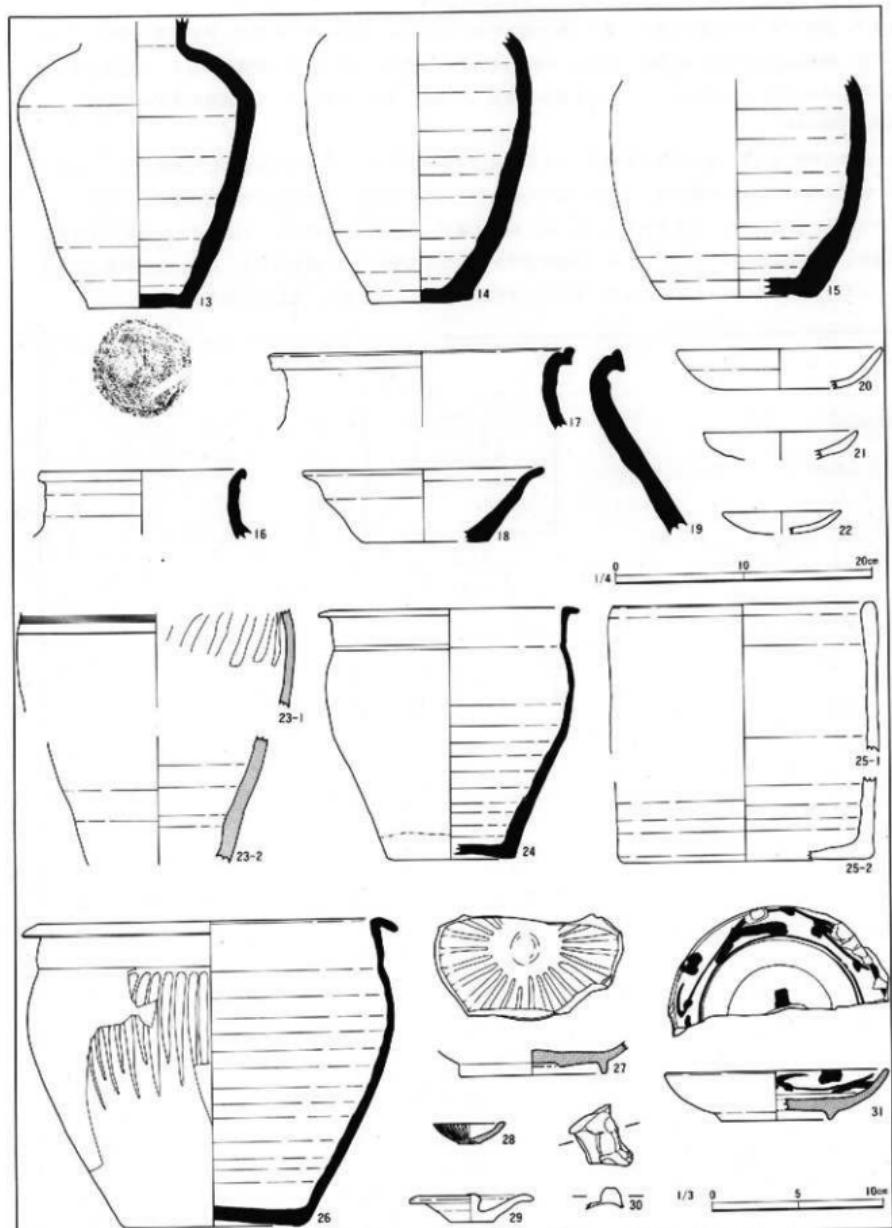
灰釉の瓶子である。肩部に5~6条の櫛目沈線を施す。内部にヘラで搔き上げた痕がある。

近現代の遺物（24~30）

塚状遺構の表面に散布する。24は越中瀬戸焼の小型の壺で、器高20cm・口径20cmを測り、鉄軸を施す。25は筒状を呈する素焼きの骨壺で、口径21cmを測る。26は丸山焼きの壺で、器高24cm・口径29cmを測り、灰白色の軸を施す。27・28・31は伊万里焼である。そのうち27・31は皿で、前者は菊花型打ち白磁で、蛇の目凹形高台である。後者は染め付



第5図 試掘調査出土遺物実測図 (1/4)

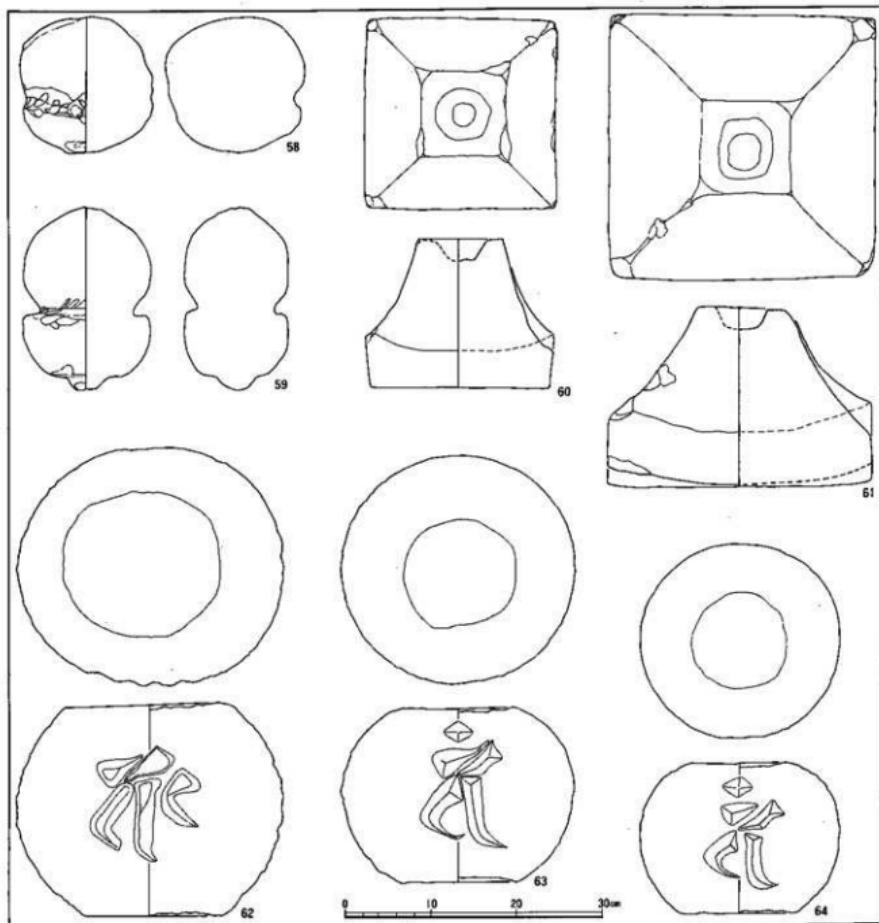


第6図 試掘調査出土遺物実測図 (20~22・27~31は1/3, 他は1/4)

け重で、器高3cm・口径13cmを測り、見込の軸を蛇の目状に剥ぎ取る。28は白磁の紅皿で、貝の文様を型押しているもので、器高12cm・口径4cmを測る。前者3つは18世紀中葉～19世紀のものである。29は蓋である。口径は4cmで、外面のくぼみの中心につまみがつく。30は土製品である。人の形に型どったもので、足の部分のみが出土した。

石造物(58～64)

五輪塔の残欠である。58・59は空風輪で、前者は片面の欠首が不明確で、後者は空風輪間に工具痕が残っている。60・61は火輪で、前者は屋根が高く、斜めに切った軒口の上辺だけが反る。後者は軒口の上辺の反りが下辺の反りよりもやや強く、前者より古い形態を呈する。62・63・64は水輪で、最大径が高さの中位にくる。また、中央部には梵字を刻み、63・64は薬研彫りになっている。14世紀前半から15世紀前半のものと推定される。なお、風化が著しい為図示しなかったが、その他に石仏もあった。これは、中肉彫で厚さは非常に薄く、頭部と胸部の境で割れていた。



第7図 石造物実測図 (1/6)

III 本調査の概要

1 本調査の経過

本調査は当初、塚状遺構に接する石敷道周辺地区を対象範囲としていた。調査の手順としては、まずは人力により道周辺の表土除去を行った。次に石敷上の盛土を剥ぎ取り、石を精査して、図下作業を行った。その後、道の覆土を全て除去し、更にその下の床土状の層を掘削したところ、下層に長方形に区画された配石遺構を発見した。その為、至急、調査対象範囲を遺構のある東側方向に拡張し、追加調査することになった。時間の都合上、遺物包含層が無い事確認の上で、遺構検出面までの大きな掘削はバックホウにより行った。次に人力で遺構検出と遺構内の掘削を行い、空中写真測量による図化作業を行った。最後に、旧地形の確認の為、地山の疊層が出るまで掘り下げて調査を終了した。最終的な発掘面積は約83m²となった。

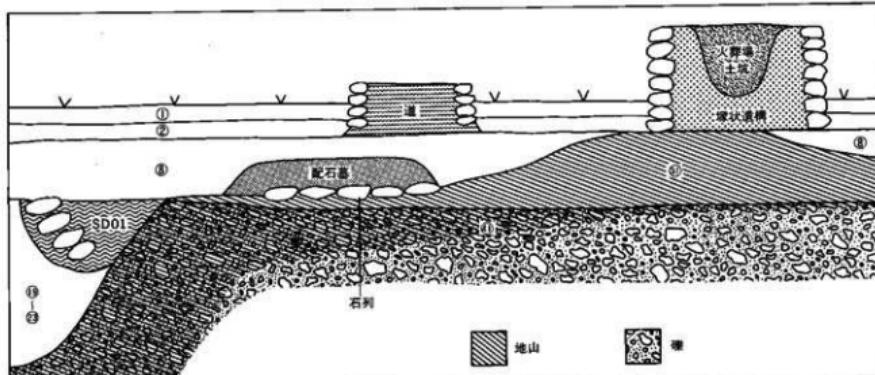
2 座標軸の設定

国土地理院設定、公共座標第7系のうち、 $x = 70570.00\text{m}$ ・ $y = 50.00\text{m}$ の点を原点として設定した。南北軸をX軸とし、 $X = 0$ から北方向に進むにつれて、X座標の数値が増える。同様に、東西軸はY軸とし、 $Y = 0$ から東方向に進むにつれてY座標の数値が増える。また、1グリッドの区画は $2 \times 2\text{ m}$ の単位とし、今年度の調査区の範囲は $X = 3 \sim 7$ 、 $Y = 5 \sim 11$ となる。

3 概況と層序

調査対象区は、塚状遺構の南側に位置する。一帯は、は場整備事業などによる大規模な改変がなされていないが、水の流れ等の自然の力による削平を受けている。平成5年度・7年度の試掘調査では、旧河道や河原が入り組んで形成されているのが確認されており、何度も流路が移動したことが推測される。

一帯の基本的層序は、上から順に第1層：黄灰色砂質シルト（表土）、第2層：暗灰黄色砂質シルト、第8層：黄褐色砂質シルト（旧床土・道検出面）、第30層：黄褐色+褐色シルト質砂まだら（地山、配石墓検出面）、第31層：灰黄色+褐色シルト砂質まだら（地山、配石墓・石列検出面）、第41層：疊（地山）となる。東半分は地山の疊が落ち込んでいる。



第8図 基本層位模式図

4 遺構

今回の調査によって確認した主な遺構は、下層では配石墓5基、石列1基、溝1条で、上層では道1条である。以下、各遺構ごとに記述する。

(1) 下層

配石墓

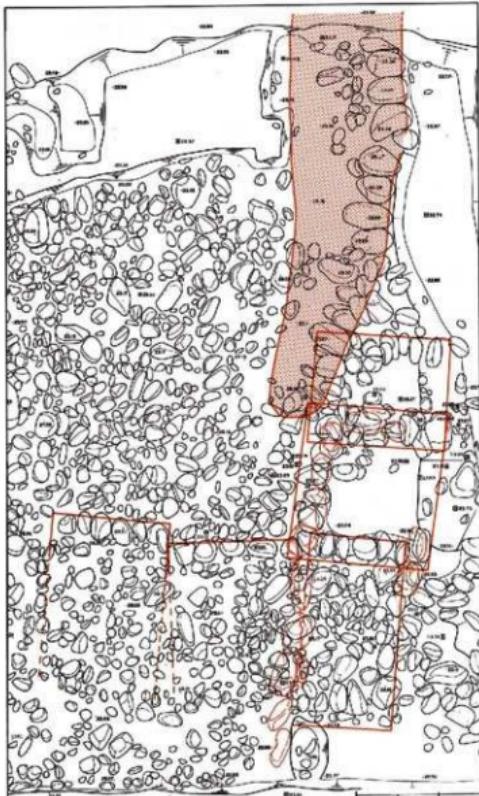
墓は配石形態から2つのまとまりに分けられる。ここでは便宜的に、南側の3基をI、東側の2基をIIとする。墓の構築面は、第30・31層である。方位は、南北軸が北に対して0~5°東に傾く。各墓は石で四角く区画されており、隣接する墓と縁石を共有している。縁石の大きさは長軸25~30cm・短軸15~20cmを測る。遺存状態はあまり良くなく、特に東側は深く削り取られており、石組みも残っていない。また、埋葬した形跡はどの墓にも残っておらず、骨器も全て破片の状態で散布していた。以下、各墓ごとに記述する。

I-1・2・3は、縁石で囲んだ内部に砾を盛って造られている。これらは北辺の石の並びから、3つに区分できる。それぞれの境界は縁石で区画されていた可能性があるが、削平によって判別出来なくなっている。

また、I-1・2については、南側の配石が失われ、墓の南端が不明確になっているが、I-3と同じ規格の範囲だったと思われる。すなわち、南北辺の規模は190cm前後と考えられる。一方、東西の規模は、比較的残りの良い北辺縁石から推定すると、I-1が110cm、I-2が120cm、I-3が100cmと推定される。平面形は南北に長く、東西辺と南北辺の比率1は5:3前後と推定される。縁石の置き方は、I-1が石の長軸を横置きに、I-2が縦置きに、I-3が長軸を横置きにして並べている。

一方、II-1・2については、縁石で囲んだ内部にシルト質の土を盛って造っており、その上を更に砾で覆っていた可能性もある。現況の平面形は、II-1は東西に、II-2は南北にやや長い長方形を呈している。境目の縁石を共有しており、II-2については、I-3とも南辺の縁石を共有している。南北辺は、境目の縁石をそれぞれに含めると、II-1は110cm、II-2は160cmと推定される。東西の規模については、東辺が削平されているため明確でないが、遺存する部分から考えるとどちらも130cmはあったと推定される。縁石の配石方法はどちらも石の長軸を横置きにして並べている。

なお、一帯は、過去に何度も古河道になっていた場所であり、調査区中央にも堀I遺跡が形成される



第9図 遺構配置推定図 (I/50)

以前の旧河遺が南北にのびていた。旧河道の両岸は河原になっており、配石墓の検出面はそれらとあまり変わらない大きさにあるため、河原石との判別がしづらくなっている。

石列

第31層が検出面である。規模は、長辺が360cm、短辺が140cmを測る。方位は、長軸が北に対して約5°東に傾く。石は大きめの長細いものを選んで使用し、長軸を縱置きにして並べている。石の大きさは、長軸35~50cm・短軸20~25cmを測る。石列上部には、墓I-2と3の縁石、II-2の西側の縁石、II-1と2の縁石が重なるようにして積まれている。石列で区画された内部に、遺構は確認されない。

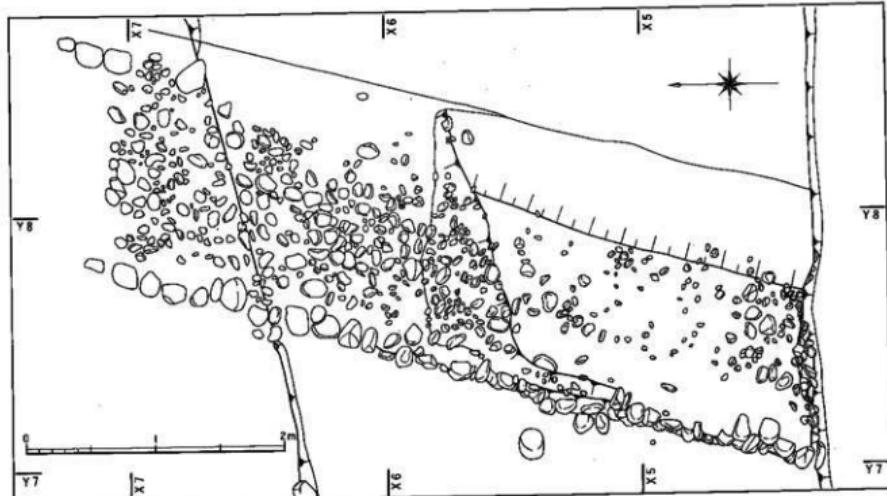
SD01

南北にのび、南端はII-1付近にある。北方は調査区外までのび、塙状遺構東側の試掘トレンチでも確認された。溝の幅は北側で140cmで、南側になると狭くなっていく。深さは65cmを測る。東縁には長軸40~50cm・短軸25cm程度・厚さ15cm程度の大きく平たい石を長軸を横置きにして、3~4段積んでいる。これらの石は全段共に上面が東側に傾いている。また、最上段の石のレベルは現存する配石墓のレベルより高い。一方、西側は自然の礫の隆起を利用している。溝は東側の落ち込みが埋まってから掘り込まれている。また、覆土には骨片や藏骨器破片が流れ込んでいた。

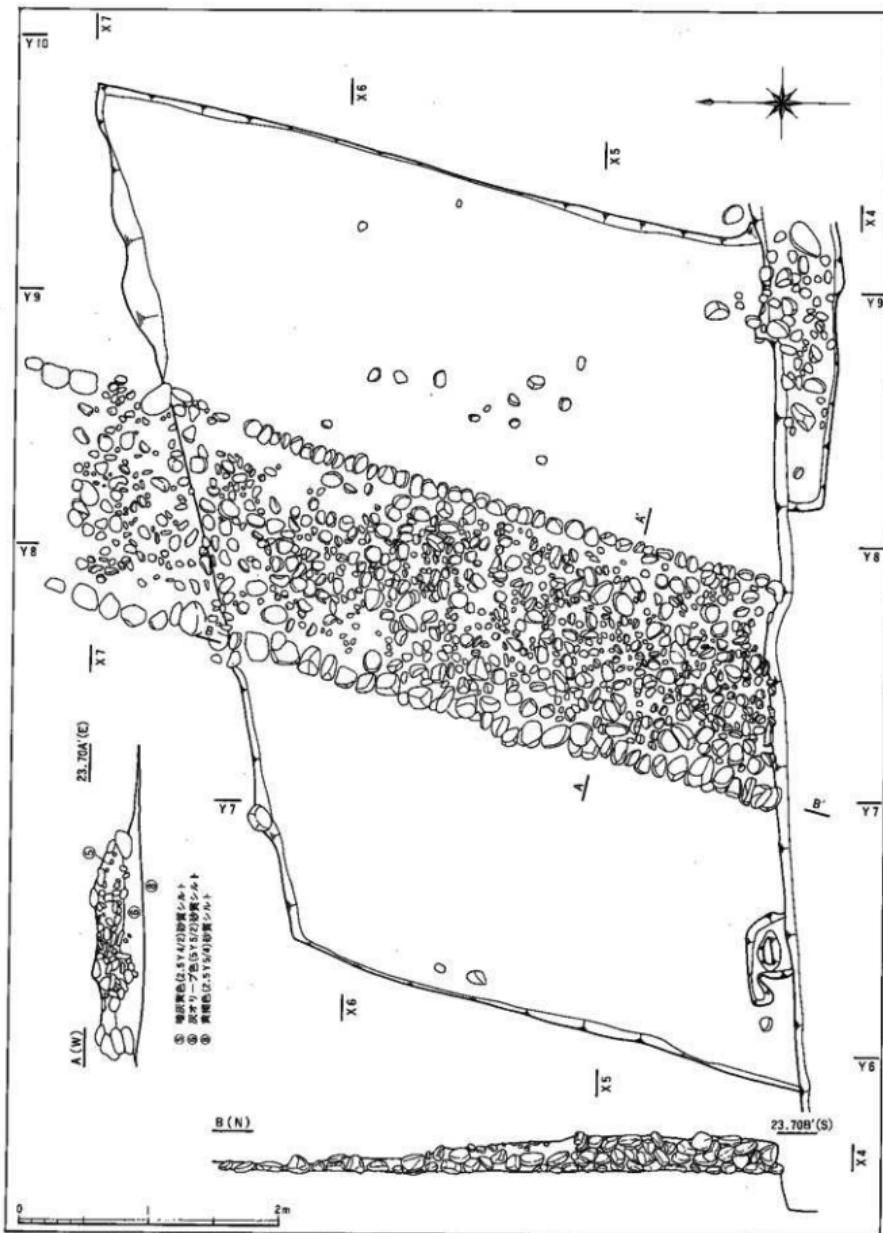
(2) 上層

三

塚状遺構の南西辺側に取り付けられ、南東辺の延長に沿うようにして南側にのびる。調査区南方の道延長部分は削平を受け、現存しない。道幅は石敷両端で170cm、東側の盛土による拡張部分を含めると220cmを測る。構造は、第8層直上に砂質シルト（第6層）を盛り、その上に礫（第5層）を敷いて整え、両端には石を2~3段積んで土止めしている。縁石の大きさは長軸20cm・短軸15cm程度で、長軸を横置きにして並べている。ただし北側は後世になってから削られ、1段しか残っていない。当時の地山面である第8層からの高さは40cmを測る。前述の通り、東側は盛土して道幅を拡張している。地元の人によると、終戦後に拡張したことである。



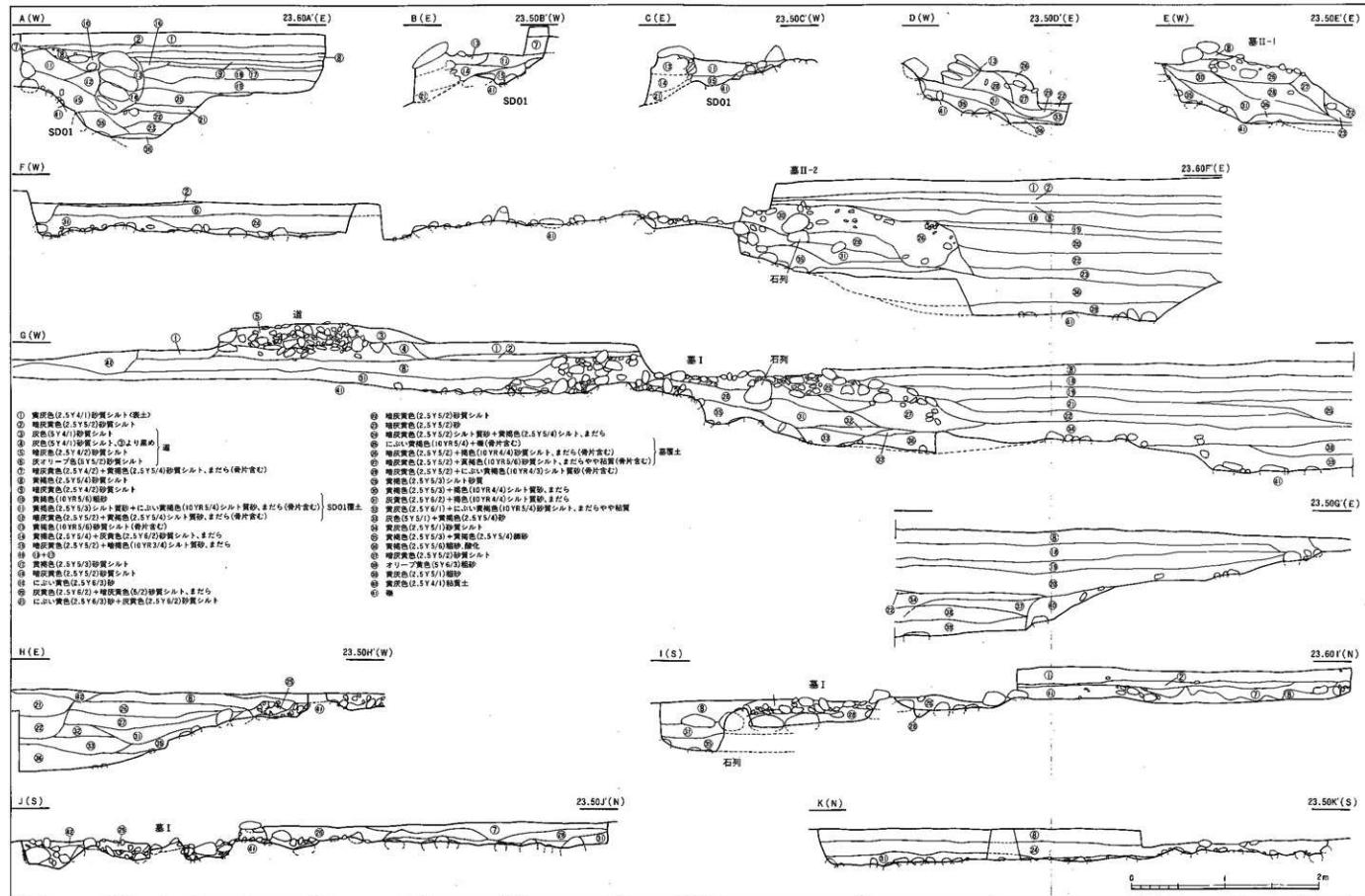
第10図 道盛土検出状況平面図 (1/40)



第11図 道石敷検出状況平面図及び立面・断面図（全て1/40）



第12図 平面図 (1/40) 右上は石列平面図



第13図 土層断面図 (1/40)

5 遺物

本調査で出土した遺物には、珠洲焼・八尾焼・越前焼・火葬骨・中世土師器・硯などがある。前述のとおり、遺物は全て破片の状態で散布しており、復元可能なものはない。ここでは、そのうち器形の分かるものを載せた。これらは塚状遺構出土の土器と同時期のものであり、なかには塚状遺構の内部で出土したり、表面より採集した遺物と同一個体のものもあった。なお、土器の時期・形態の記述にあたっては、珠洲焼は吉岡氏の編年（1994）を、八尾焼は酒井氏の分類（1992）を、越前焼は植崎氏（1986）の編年を参考とした。

珠洲焼（32～35・38～43）

32～35は壺である。32は壺T種で、外面に並行の叩きを施す。口径は20cmを測る。Ⅲ期に比定できる。34・35は小型の壺R種である。35は道より出土したもので、器高20cm・口径10cmを測る。試掘調査出土のものと同一個体であり、そのほとんどは塚状遺構のAトレーニング南側から出土した。これは、火葬場段階の土坑を掘り込んで埋められていたもので、上には珠洲焼の片口鉢の破片（38）が蓋として被さっていた。また中にはまだ火葬骨が入っていた。時期はⅢ期に比定できよう。

38～43は片口鉢である。38はこね鉢で、口径は20cm、器高は20cmを測る。道から出土したものであるが、前述のように同一個体が35の蓋として塚状遺構から出土した。39・41・43にはおろし目が施されている。そのうち39・43には使用痕が認められ、器高の三分の一から半分の部分がすり減っている。それぞれの口径は40 φ 20cm、39 φ 27cm、41が22cm、42 φ 23cmである。38・40・42はⅡ期、39・41はⅢ期に比定できよう。

このうち、遺構内出土のものは33・35・38・39・41である。41は墓I-3から、33は墓II-1から出土した。また、35・38・39は道より出土したもので、試掘調査で出土したものと同一個体であった。

中世土師器（44～55）

口縁部の端部が尖り、器壁は薄く、胎土が緻密である。口縁部が内湾し器高が浅いもの（44・45・46・48・50・51・54）、口縁部が内湾し器高が深いもの（54）、口縁部が直線的にのびるもの（47・49・52・53・55）に分けられる。口径は44～47は7cm、48～52は8cm、53は9cm、54は10cm、55は13cmを測る。また、47には漆が、49・52にはタールが口縁部に付着している。54は13世紀中頃、その他は14世紀代のものである。

44・46・51は墓I-1から、50・54は墓II-2から出土した。

八尾焼（36）

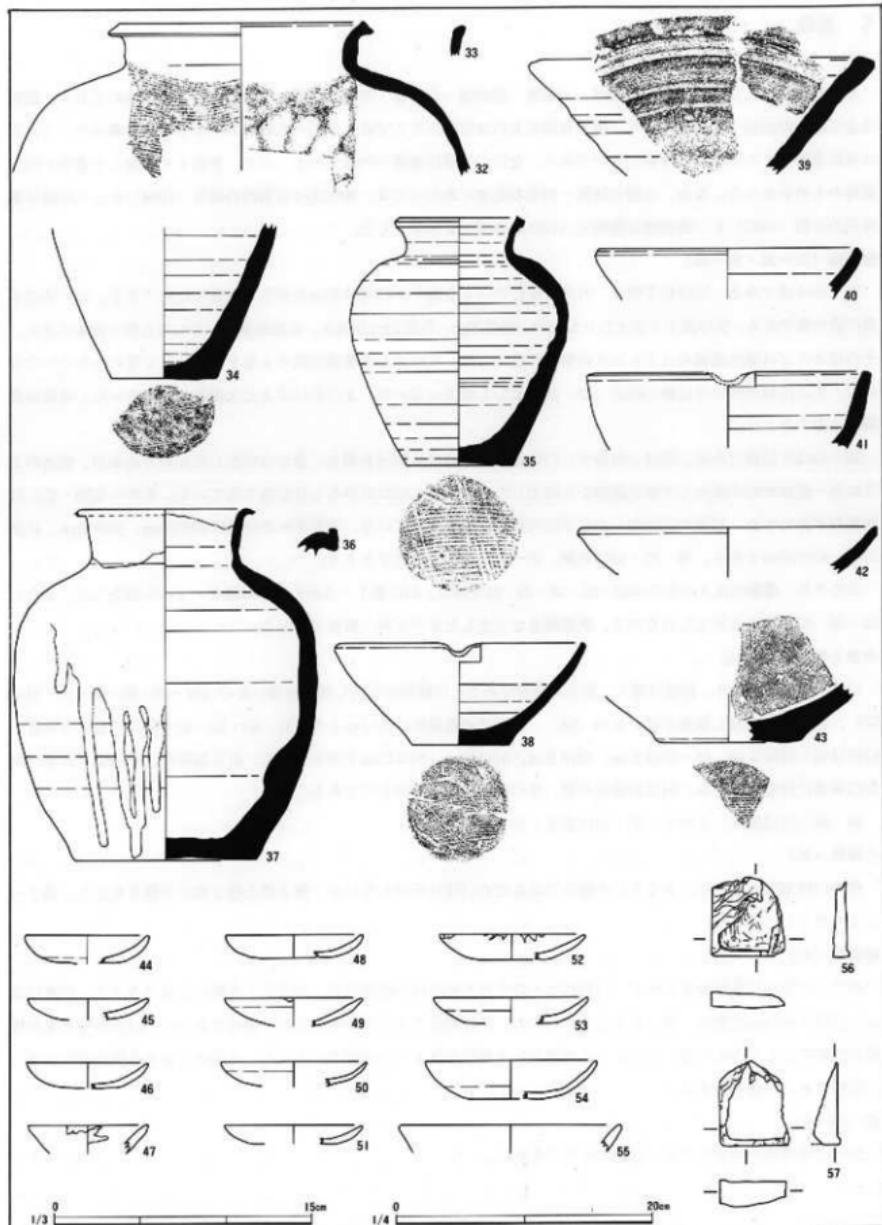
壺の口縁部破片である。あまりに小破片であるため口径は分からないが、第2群土器a類に分類されよう。墓I-3より出土した。

越前焼（37）

壺で、片面には自然釉がかかる。口唇部は欠けており形状は不明確だが、おそらくⅡ期に比定できよう。器高は28cm、口径は約14cmを測る。道から出土したもので、試掘調査で出土したものと同一個体であった。ほとんどは塚状遺構の内部で出土したもので、Aトレーニング南側から火葬骨が詰まつた状態で出土した。八尾焼とあまり区別が付かず、八尾焼である可能性もある。

硯（56・57）

56には使用痕が認められる。近世のものであろう。



第14図 本調査出土遺物実測図 (44~57は1/3, 他は1/4)

墓I-1:44・46・51, 墓I-3:36・41, 墓II-1:33, 墓II-2:50・54, SD01:55, 道:35・37・38・39・42・48・49・56・57,
他は遺構外出土遺物

V まとめ

1 堀I遺跡について

(1) 遺構

配石墓については、縁石を隅どおしで共有しており、一人あたりの占有面積が小さい。この形態は後述する形態分類のⅢ b類に該当し、個人墓から集団墓への変遷の過渡期にあたる形態として位置付けられる。構築に際しては石列を配した後、墓の配石を行っている。石列は、後に造る墓の区画をある程度決めるためのものと推定され、配石墓の縁石はそれに重なるようにして配置されている。各墓の造墓順番については、石列を基準として造られる墓II-1・2、墓I-3が先行し、その後、墓I-1・2が造られたと推測する。墓の終焉については、層位から配石墓形成後に水が流れた形跡が窺え、その影響を受けた可能性が高い。一帯の田や用水の方向を見ると、北から西に傾いているものが多く、洪水の際にいくつもの支流が北西方向の井田川へと流れ込んだものと推定される。

塚状遺構については、諸事情により現段階では詳細な記録作業は行っておらず、簡単な試掘調査を行うに留まった。現時点で推定されることをまとめると以下のようになる。塚状遺構は築造後、数回にわたって拡張・整備されている。南西部には、南西辺に平行して大きめの石が直線的に並んでおり、断面でも中央部を区画するよう積んであるのが観察された。これらは塚状遺構の旧範囲を区画していた縁石とも推定でき、南東部でも同様の石が確認された。また、南東部については、盛土の様子が中央部と少し異なっていた。この場所は、塚状遺構の入り口部にあたり、大きめの石を何列か並べて階段状もしくはスロープにして昇り口としているが、出土遺物がほとんどなかったことからも塚状遺構築造後に取り付けられた儀式的空间とも考え得る。現代になると、塚状遺構は火葬場に転用される。地元の人によると、昭和37年まで使用されていたそうである。現在まで、この場所には死者を弔う場としての意識が継承されてきたことが分かる。なお、火葬場に伴う土坑の埋土を切って埋め込まれた藏骨器があったが、これはごく最近になってから周辺で出土したか、もしくは火葬場の土坑を掘った時に出土した藏骨器をここに埋めたのだろう。

石敷道については、覆土に近世磁器が混ざり込んでおり、敷設時期は近世以降と判断できる。出土遺物は、塚状遺構の覆土や上面で採集されたものと同一個体もあった。これは、再葬の段階で既に破片になっていた遺物が、拡張・整備の際に散らばった為であろう。

(2) 遺物

藏骨器には珠洲焼・八尾焼・越前焼の壺、瀬戸焼の瓶子を使用している。殆どは珠洲焼・八尾焼で占められ、その他は1個体ずつの出土に過ぎない。中世墓・塚状遺構とともに、藏骨器の多くは破片の状態で出土するため、塚状遺構に移す際に既に壊れていたものが多いと考えられる。また、残りの良いものでも口縁部が無いものが多くあり、意識的に打ち欠かれた可能性があろう。蓋には珠洲焼・八尾焼の片口鉢を用いているが、容器となる壺と比べると数量がやや少ないため、壺等の底部や有機物、石等も利用したのかもしれない。

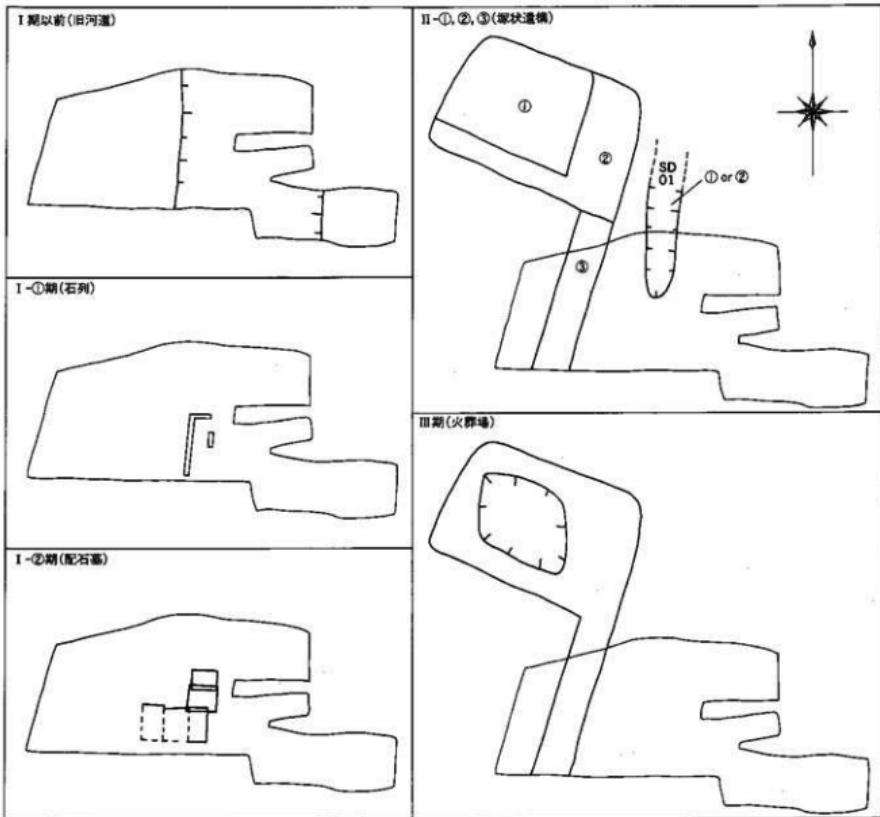
藏骨器の種類と割合は、当然その土地の陶器の流通状況に比例する。本遺跡では、当時、生産・流通の面で他の陶磁器を超越していた珠洲焼に次いで八尾焼が多用されていることが特徴的だ。八尾焼は、婦中町の南隣に位置する八尾町が産地であり、窯業期間は13世紀中頃から14世紀末頃までとされている。壺などの日常容器を中心に珠洲焼を補充する程度の生産量だったようだが、本遺跡からは地理的に最も近い中世窯であり、県内の他の中世墓と比べると八尾焼の占める割合がかなり大きい。八尾焼には壺・すり鉢・壺といった器種があるが、生産の中心となるものは壺であった。そのため、これまでの研究でも、出土量の多い壺を中心に分析してきた。壺の出土例は少なく、特に本遺跡で出土するような小壺は珍しく、特殊品としてつくられたと考えられる。これらは藏骨器という性格のものであるため、製造年代を特定するのは困難だが、八尾焼の形態を考えていく上で貴重な資料となろう。前述した八尾焼の窯

業期間から考えると、後で述べる中世土師器の年代より少し古いか同時期のものとなる。

珠洲焼は、前述の通り当時北陸地方において絶対的な流通量を占めていた焼き物で、県内の他の中世墓の発掘例でも藏骨器のほとんどを占めている。堀Ⅰ遺跡もその例に漏れず、藏骨器の3分の2以上を占めている。器種は八尾焼と同じく小壺が多い。出土した珠洲焼の時期幅はⅡ～Ⅳ期と長く、そのうちではⅡ・Ⅲ期がほとんどを占めている。それは中世土師器の年代と比べると古めであり、伝世品として受け継がれたものかもしれない。また、片口鉢には使用痕が確認される為、長期間調理具として使用され、その後転用されたと考えられる。

中世土師器は、埋葬の際の祭祀用に使われたものであろう。帰属年代は13世紀中頃から14世紀代であり、そのうち14世紀代のものが大半を占めている。現在までに研究がなされている富山県の中世土師器の編年は、県西部の出土土器を参考にしたもののが中心となっており、今回もそれを参考とした。しかし、最近の婦中町域の発掘調査における資料の増加に従い、その形態の編年には地域差があることが指摘されてきており、年代は少しづれるかもしれない。

石造物については、製造年代が14世紀前半から15世紀前半と考えられ、墓標や供養塔として建てられていた可能性が高い。なお、周辺にある現在の墓地にも同時期の五輪塔残欠が多くあり、この中世墓地から移された可能性もある。



第15図 変遷推定図（Aの場合）

以上より、堀Ⅰ遺跡の中世墓の主な造墓期間は、13世紀中頃から14世紀代と推定される。

(3) 変遷

塚状造構の築造開始年代にはいくつかの可能性があり、配石墓の造墓年代を基準として、A. やや古い～同時期、B. それより新しいとする。まず、どちらの場合にも共通することを挙げておくと、塚状造構は築造後に拡張・整備されているが、層位から考えるとその時期は配石墓の造墓年代より新しいといえる。また、塚状造構より出土した遺物の年代が配石墓のものと変わらない為、拡張の目的は、周辺の配石墓に埋葬されていた藏骨器を集めて再葬する事にあったと推測される。藏骨器を集めた原因には2つの可能性があり、一つには水害によって周辺の配石墓が削平された際に藏骨器を少し高い所にあった塚状造構に移した可能性が、もう一つには田畠の整備の際に出土した藏骨器をまとめた可能性が挙げられる。前述の事を念頭に置き、それぞれの場合について考えると、Aの場合、塚状造構は築造当初は個人墓の配石墓であり、少なくとも2回の拡張がなされたと考え得る。次にBの場合は、当初から藏骨器の再葬を目的として築造されたと考え得る。このように考えると、塚状造構には試掘調査で確認しただけでも10個体以上の藏骨器が埋葬されていることから、当時一帯にはもっと広い墓域が形成されていたと推測し得る。

以上より当地区の変遷は、Bの場合、石列（I-①）、配石墓（I-②）、塚状造構北西～中央部（II-①）、塚状造構南西・東南拡張部（II-②）、道（II-③）の順で築造されたと推定される。また、北東辺に施されている石積みはII-②段階、SD01はII-①～②段階と思われる。一方、Aの場合は、前述のII-①のうち北半部が、I-①②より古いもしくは同時期となる。

なお、詳細については、中央部が火葬場段階の土坑によって大きく削平されていることから、これ以上の分析をする事ができなかった。

(4) 堀Ⅰ遺跡についての検討

本遺跡は、中名・道場地区と清水島地区にある集落遺跡群のほぼ中間地点に位置しており、造墓期間はこれらの存続期間に含まれる。本遺跡の南方にある清水島Ⅱ遺跡（13～16世紀）では、溝によって居住地と区切られた土塙墓群が確認された。一方、本遺跡の中世墓は、集落から離れた場所に立地し、陶質藏骨器を使用する配石墓で構成されることから、前述のものとは明らかに形態を異なる。北陸の中世墓の例を見ると、同様の形態をとる墓の被葬者は有力領主層や僧侶の場合が多い。本遺跡もその例から外れないものと思われ、特定の造墓集団による家族墓的な墓地であったと推測される。また、当地区的地名には立寺町や寺屋敷といった地名が残ることから、墓地の造営に寺が関わっていた可能性も考え得る。以上のことから、この一帯では一般民衆は各集落を単位とした共同墓地（土塙墓群）を居住地に隣接して造っており、一方熊野地区一帯の集落を統括していた有力者一族は独立した場所に墓地（配石墓群）を構えていたと推定し得る。調査の進んでいない現時点では推測の域を出ないが、周辺の他の集落遺跡にも土塙墓群が存在する可能性があろう。いずれにせよ、この地域では階層別に墓地を設定していたと考えてよい。

堀周辺は、層位から絶えず水が浸く地であったことが分かっている。中世には一時に安定期として選ばれたが、廃絶に追い込まれたのはやはり水害が原因だったと思われる。しかし、その後墓地はどこに営まれたのだろうか。周辺の発掘調査では16世紀後半までの集落が確認されたおり、少なくともその時期までの墓地があるはずである。これについては幾つかの可能性があり、まず一つには遺跡西部の試掘調査で、近世墓と推定される集石造構が確認された一帯が挙げられる。ただしこの場合は確認された範囲があまりにも狭い為、造墓後削平されたと考えねばなるまい。また一つには現在の墓地の位置が挙げられる。付近に墓地は何箇所かあり、そこには五輪塔の残欠があり流れの古さを感じさせる。これらは寺や神社の近くに位置しており、近世化した墓地景観が窺える。その他には、まだ調査の進んでいない道場・中名地区にあったとも考え得る。これについては今後の調査の成果が待たれよう。

2 中世墓について

近年において、中世墓を対象とする発掘調査例が増加してきており、それらの成果によって中世墓について様々な理解を得ることが可能となってきた。ここでは、北陸の主要な中世墓と他地域の代表的な例を取りあげ、類型的に整理することから、中世墓の形態・変遷について考え、中世墓の概観を知る手がかりとしたい。

(1) 中世墓の形態

① 中世墓の形態分類

中世墓には色々なバリエーションがあり、それを分類するにあたっては様々な視点・方法があると思われるが、ここでは外部形態により以下のように分類した。

I 土饅頭型（上面または裾部に集石が有るものと無いものがある。）

II 塚墓（周溝によって区画。内部はほとんどがマウンド状になる。）

a 区画が独立

b II a どうしが接続もしくは重複

c 一つの区画内に複数埋葬

III 配石墓（方形又は長方形に石を配して区画。配石や封土の構造パターンは様々で、バラエティーに富む。）

a 区画が独立

b III a どうしが接続もしくは重複

c 一つの区画内に複数埋葬

IV 墓標（標石・石塔等）を造立

V 集石墓（不定形・小規模）

VI 土壙墓（外部施設無または目印程度の集石のみ）

a 単独または少数

b 群集

VII 特殊形態

a 横穴墓

b 地下式壙

c 古墳の墳丘を利用

II・IIIは墓の設置方法により、同様にa～cに分けられる。IIIとVは石を墓の外部形態の一部として用いる点では共通しているが、石の配置に規則性をもつものを配石墓、不定形のものを集石墓として区別している。墓標については、中世前期よりいろんな外部形態と複合してきたが、ここでは墓標自体に重点が置かれるタイプのものをIVとした。
② 特殊な墓形態

VIIの横穴墓と地下式壙は、富山・石川に共通して存在する特殊な墓地のタイプである。横穴墓は岸壁や丘陵傾斜面に横穴を掘り込んだもので、14世紀を中心に13～16世紀にかけて造られる例がある。富山県では薪田薬師中世墳墓、脇方横穴墓群、石川県では五十里洞穴中世墓、矢駄遺跡、地頭町中世墓が挙げられる。現在のところ能登・氷見地域に集中しているが、内陸部にも分布するようで今後の資料の増加が待たれる。このタイプの墓については、中世の鎌倉地方に見られる墓制である「やぐら」との関連性が指摘されているものがある他（櫻井基一・唐川明史1976『富来町史 総資料編』）、古墳時代の横穴墓を転用したと推定されているものもあるが（竹腰・岡本・酒井1985『富山県氷見市 薪田薬師中世墓発掘調査報告書』）、今回は筆者の力量不足により例の紹介のみにとどめる。一方、地下式

墳は、縦穴を空けた後横方向に玄室となる穴が掘り込まれるもので、15世紀代の例がある。富山県では山南町遺跡、石川では敷地天神山遺跡群、津波倉ホットジ遺跡、刈安野々宮遺跡が挙げられる。中世墓の多様性が表れている例といえよう。

③藏骨器

陶磁製藏骨器の種類や器種は、一般に墓地が位置する地域における陶磁器の流通の範囲と量に対応しており、石川・富山・新潟の場合は、生産・流通が他の圧倒的である珠洲焼の割合がかなり高く、その他は生産地と各墓地の位置関係に応じて加賀・越前・八尾などが使用されている。また、福井では越前焼が圧倒的に多い。蓋として使われた鉢・碗などの陶磁器も同様の傾向にあるといえる。

④被葬者の階層と墓形態

被葬者の階層を表す重要な基準として、墓の外部形態が挙げられる。外部施設は内部の埋葬施設よりも経済力を要するものであるだけに、被葬者の階層性をより強く反映したものになる。一般的な外部施設には、マウンド、配石、周溝、墓標などが挙げられるが、それらを有する墓の被葬者は支配者階層や僧侶といった有力者が殆どである。

一方、内部の埋葬形態に表れる一般的な階層性は、上位のものから順に、火葬墓では陶磁製藏骨器、木棺・曲物・布袋等の有機物製容器、直接埋葬となり、土葬墓では木棺・甕棺・直葬となる。また更に、陶磁製藏骨器には被葬者の階層の差が表れる場合がある。生産地が遠く流通量の少ない陶磁器（北陸地方の墓地なら東海系や輸入陶磁器など）を使用する墓については、それらを手に入れるだけの経済力が裏付けられる。北陸では、石川県の軽海中世墓・劍崎遺跡・普正寺遺跡などがその例である。約60個もの藏骨器を使用した滋賀県の日野大谷遺跡では、個人によって様々な種類の藏骨器が使用されており、それらを選択できるだけの豊かな経済力が推測される。土葬木棺墓については、古代の有力者の墓形態を引き継いだものとして優位性を感じられるものもある。

しかし、このような埋葬形態に見られる傾向は、全ての場合に当てはまるものではない。葬法や埋葬施設は、造墓年代や地域差、宗教差、個人的考え方等が反映され、階層性と即座につなげる事はできない。それを示す一例に、同じ墓地内にある外部形態が同じ墓の間で、埋葬形態が異なる例がある。配石墓間で併用された埋葬形態の例としては、石川県軽海中世墓の陶製藏骨器と火葬骨埋葬ビット、湯屋チョウヅカ遺跡の陶製藏骨器と木製容器、普正寺遺跡の陶製藏骨器と火葬骨埋納ビット、三重県惟山中世墓の陶製藏骨器の火葬墓と木棺の土葬墓などが挙げられる。このことから、被葬者の階層を推測する際には、その差が顯著に表れる外部形態を中心に、埋葬形態や副葬品との組み合わせの他、時期差・地域差など諸々の要素を含めて総合的に判断する必要がある。

ところで中世においては、多くの中世墓地が同じ形態の墓によって構成されているが、これは基本的に階層別の墓地空間をもっていたことを示している。複数の階層で構成されている墓地についても、形態別にまとまった配置をみており、その例としては大阪府岡本山古墓群の石塔を配する墓と土塚墓、石川県白山町遺跡の方形配石墓と土塚墓、静岡県一の谷中世墓の塚墓と配石墓などがある。こういった群構成は、被葬者が属する集団のまとまりを反映していると捉え得る。

階 層	外 部 形 态	埋 葬 形 態	
有 力 者 層・僧 侶 層	土鏡頭型・塚墓・配石墓・横穴墓、地下式墓・墓標造立	火 葬	藏骨器、木製容器
		土 葬	木棺・甕棺
百 姓 層	集石墓・土塚墓	火 葬	木製容器・布袋・火葬骨埋納穴
		土 葬	直葬

第1表 中世墓の主な形態パターン

(2) 中世墓の変遷

① 墓形態の変遷

前項①のような形態分類から北陸地方の中世墓地の変遷をまとめると次のようになる。

12世紀後半

墓分類はI・II a・VI aである。墓地の造営は古代的な特徴を引き継いでおり、極めて限られた者のみが外部埋葬形態を伴う造墓活動を行う。どの墓地のタイプも個人墓的様相を呈し、一つの墓単位内には一人のみが埋葬され、追葬はほとんど見られない。これらには一族や寺の代表者などといった特定個人が葬られる。なお、百姓層の墓地形態はよく分かっていない。

13世紀前半～13世紀後半

墓分類はI・II a・III a・VI a・VI bである。この時期を境として、一齊に新しい墓地が造営される。また、この時期より14世紀までの間は、墓のタイプが外部形態・埋葬形態ともに多様化する時期であり、配石墓(III b)もこの時期に出現する。依然個人墓的ではあるが、墓地数と墓地内に造られる墓単位数の増加から、被葬者の枠が拡張が始めたことが窺える。なおVI bは群集土壇墓であるが、この時期の例は非常に少ない。

14世紀前半～14世紀後半

墓分類はII a・II c・III a・III b・VI a・VI bである。土鏡頭型のIは無くなる。III bが出現し、14世紀後半からはII cが加わる。配石墓のIII bは、前段階の單葬配石墓どうしが縁石を供用したり重複して造られ、埋葬ごとに配石範囲が拡張されていくものである。本書で報告した堀I遺跡はIII bタイプの墓地であり、この時期に造墓を開始する。また、塚墓のII cは、周溝に囲まれた一区画の墓域内に多数の埋葬がなされるものである。この時期には被葬者層が更に拡大し、外部施設における一人分の占有面積は狭くなる。また、VI bの例も増加していく。

15世紀前半～15世紀後半

墓分類はII c・III b・VI bである。II a・III aといった個人墓的形態が無くなり、共同墓地化が進む。

16世紀前半～

墓分類はIV・VI bである。この時期の墓地は、一定の空間に計画的な造墓が行われ、共同墓地的景観を呈するようになる。IVについては墓標が別の場所に移動されることが多々あり得る為、時期は断定し難い。ここでは配石墓・塚墓にかわって出現するタイプとしてこの時期に設定してみたが、出現時期はもう少し遅ってもよいかもしれない。

以上より外部形態を有する中世墓の変遷は、土鏡頭型が最も古く、次は配石墓と塚墓が並行して存在、最後に墓標が立ち並ぶ形へと推移するといえる。土鏡頭型の墓地は、12世紀後半から13世紀後半に造営される。次に続く配石墓と塚墓は、区画を石であるか溝であるかの違いはあるものの、共通した変遷を遂げており、個人墓的な段階から共同墓地的な段階へと推移している。塚墓はII a・II cの順に、配石墓はIII a・III bの順に時代が下り、各々の造墓年代は、II aが12世紀末から14世紀後半、II cが14世紀後半から15世紀代、III aが13世紀前半から14世紀後半、III bが14世紀前半から15世紀代である。なお、後述する他地域の墓地では、III bに続く形態としてIII cが存在し、一区画の中に複数の埋葬が計画的に配置された集団墓地を形成している。この配石形態は北陸では今のところ例がないが、今後の調査によっては確認されるかもしれない。現在までの調査例から見られる北陸地方の地域性として、新潟では塚墓の例が多く、「方形基壇墓」ともいわれるII cタイプのものがよくみられるのが特徴的である。一方、富山県・石川県では塚墓は少なく、そのうち単独で存在するものの中には埋葬痕跡が無く、性格が不明であるものが含まれる。これらは墓とは別の特殊な性格をもつ可能性がある。そして、墓標を造立するIVについては墓域の配分・構成が設置当初から意識されたものと思われ、埋葬は規則性をもって行われる。これは近世的共同墓地によく見られる形態であり、現在に通じる「墓=墓標」という思想は、この延長にあるものといえよう。

一方、土壙墓は中世全般を通して造られている。島田氏は中世前期における墓の様相として「集落の一角、建物に近接して造られる単独墓の例」を挙げ、「集落で検出した墓はいわゆる“屋敷墓”的範疇として建物群の付近に存在する」ことを指摘している。また、中世後期には集団墓地が増加し、「明らかに集落と墓地は分けられる」と述べている（1994『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告（遺構編）』）。これを参考として考えると、土壙墓は中世前期に属するVI aと後期に属する例が多いVI bに分けられる。まずVI aは、12世紀代から14世紀代の例がある。これは被葬者が限定された個人墓的性格のものであり、木棺に埋葬することが多い。当期の他形態の墓地は丘陵尾根や斜面など集落から離れた場所に立地する場合が多いが、このタイプは屋敷墓として居住空間に造られる場合もある。一方、VI bは14世紀代から16世紀代を中心に、13世紀前半から17世紀代の例がある。中世前期にも存在した可能性もあり得るが、簡易な土壙墓は墓としての判断が難しいこともあり、実態はよく分からぬ。このタイプは共同墓地的に群集し、集落付近に立地するものは溝で区切って墓地空間をつくり出している。また、墓地の内部で幾つかのまとまりがみられることから、家族単位等で分かれた集団がそれぞれ一定の空間をもっていたと推定される。VI aとVI bの性格は明らかに異なり、VI aは集団から超越した存在としての被葬者像が浮かぶのに対し、VI bの被葬者は集落の一般的構成員の共同墓地として認識されよう。

さて、ここで他地域の例をみてみよう。東海・近畿・中部地方の墓地のうち形態の変遷が追い易い大規模な墓地を取りあげてみたところ、多少の時期差や墓制の違いはあるものの、おおよそは同様の変遷をたどっていた。まず、配石墓を中心構成される墓地の例には、滋賀県日野大谷遺跡（III a・III b・III c）、奈良県大王山遺跡、（III a・III b・III c）、三重県椎山中世墓（III a・III b）、愛知県法圓寺中世墓（III a・III c）などがある。それらの例では、III a・III b・III cの順に変遷する様子がたどれる。III a・III b段階では、血縁関係などによって数基単位でまとまり、造墓順に並んでいる様子が窺える。続くIII cは一区画の中に複数の埋葬が計画的に配置され、完全に集団墓地化している。一方、塚墓が集団墓地化したII cの例には、鳥取県妻波古墓が挙げられ、周溝内に100もの埋葬が認められる。この墓地には、石塔が多用されることからも中世後期の特徴が窺える。そして、IV bとVIで構成される大阪県岡本山古墓群C地区では、VI bからIVへの変遷がみられる。IVは埋葬主体の直上に設置された石塔が列をなして並んでおり、中世後期の集団墓の一つのタイプとして認識できる。

	1100	1200	1300	1400	1500	1600
I		■				
II a		■	■			
II c				■		
III a			■			
III b				■		
VI a	■	■	■			
VI b		■	■	■	■	
VII a			■	■	■	
VII b				■		

第2表 北陸地方の墓分類別存続期間

②墓地の立地の変遷

墓地は、外部形態の変化とともに造墓空間の選地にも変化がみられる。外部形態を有する上位階層の墓地の立地は丘陵尾根上、丘陵斜面、平野・台地の順に移動する。その原因の一つとしては、被葬者層の拡大と墓地に対する意識の変化が挙げられよう。丘陵尾根の時代には、きちんとした造墓行為を行うのは極めて限られた者であり、墓地は俗世間である集落とは隔離すべき空間として捉えられていたが、その後、鎌倉新仏教の浸透などにより造墓が一般的になってくると、墓地はより多くの人の埋葬・供養に都合の良い低地へと降りてきたと推定し得る。ただし、墓地空間と居住空間はきちんと切り離され、距離が置かれるかもしれない溝で区切られている（屋敷墓は例外）。それでもう一つの要因としては、近世的な墓制への変化の兆しが表れてきたことが推測される。近世になると、墓地の造営・管理には集落内にある寺院が深く関与するようになり、寺院のもとに村の共同墓地が形成されるようになる。よって中世末はその過渡期と捉え得る。一方、外部形態を有しない下位階層の墓地の立地も同様に変化するものと推定されるが、中世前期の様相はよく分かっておらず、資料の増加が待たれる。

③北陸地方の中世墓変遷の画期

以上の結果より、ここでは北陸地方の中世墓の変遷に3つの画期の設定を試みる。

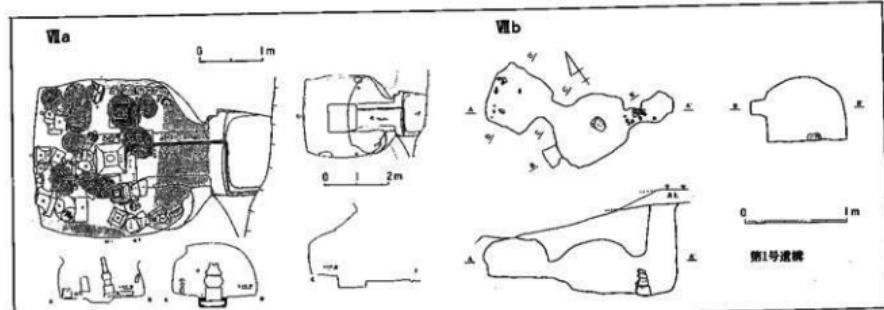
まず、第一の画期は13世紀前半に設定し得る。この時期には新しい墓地が一斉に出現し、前時代よりも全体の墓地数が増加する。この現象の要因としては、在地開発領主層が勢力を拡大し始めたことが挙げられよう。ここで鎌倉時代の越中の社会的背景をみてみると、久保氏は当期の守護支配体制について、「鎌倉時代の越中における守護支配は、守護・守護代がともに在鎌倉であり、在国して国務を掌握したのは又守護代であったといえる。」とし、そういった守護の在地からの遊離性により「國務が私物化される傾向をみせていた」と述べている。そして更に、在地領主である地頭代層はこうした越中の守護支配体制の実態を自己の所領の拡充強化に利用し、自立化をはかったと推測している。そういう背景から、この時期には勢力を延ばした在地領主層によって、多くの墓地の造営が開始されたものと考えられる。

続く第二の画期は14世紀前半における。この時期は個人墓的形態を継続しつつも、集団墓地への転換期として捉えられる。また同時に墓地の多様化も認められる。社会的背景としては、農民の地域的結合（惣）が成立してきた時期であり、惣墓の形成も見受けられる。

そして第三の画期は16世紀代に設定する。この時期には共同墓地化が進行し、中世に造墓を開始した墓地の多くは終焉を迎えている。その要因は、一つには寺院が関与する墓制への変化が、それでもう一つには16世紀後半から始まる天下統一事業に伴う兵農分離などの統制にあると推定する。

終わりに

以上、堀I遺跡の調査結果をまとめるとともに、中世墓の概観を若干検討してみた。しかし、堀I遺跡の塚状遺構と中世墓の評価には不安が残っている他、中世墓の概観については社会背景や年代観等に多々の誤認もあるかと思われ、今後の更なる分析を必要とする点がかなり残された。自身の力量不足を反省しつつ、これからも課題としていきたい。

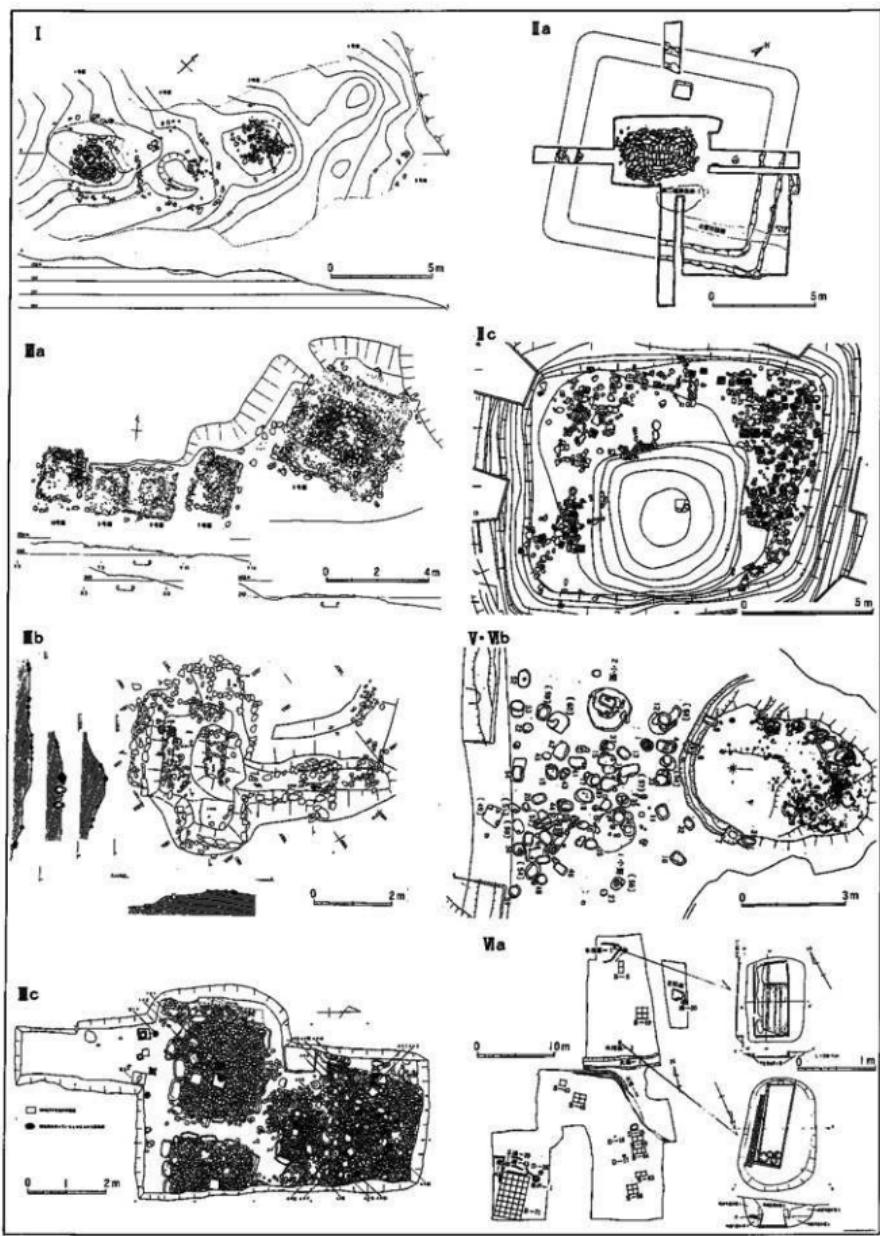


第17図 形態分類別墓地検出例（※全て各々の発掘調査報告書より転載）

VIa. 萩田塚跡中世墳墓, VIb. 津波倉ホットジ遺跡

有 力 者 層・僧 侶 層		百 姓 層		
I 土鏡類型	III a 配石墓・区画独立	IV 墓標造立	V 築石墓	
丘陵尾根 ♦ 湯屋チョウブカ遺跡 医王山城寺遺跡北尾根 竜ヶ池觀音堂塚群 小兒石遺跡 ♦ 斜面 福水朝日山遺跡 平野 河津塚	丘陵尾根 ♦ 日野大谷遺跡Ⅲ区頂部 大王山遺跡 医王山若宮遺跡 医王山城寺遺跡南尾根 鐵壇山遺跡 椎山中世墓 ♦ 一の谷中世墳墓群 黒川上山古墓群 輕海中世墓 堂坂遺跡 白山町遺跡 法圓寺中世墓	丘陵斜面 岡本古墓群C地区上層 平野 明泉寺中世墓地 VI a 土塚墓・単独または少数 台地 平野 白谷岡ノ城北遺跡 梅原胡麻堂遺跡 三木だいもん遺跡 吉倉A遺跡 吉倉B遺跡 中村ゴウデン遺跡	丘陵尾根 細口源田山遺跡	
II a 塚墓・区画独立	丘陵斜面 一の谷中世墳墓群 ♦ 座禅塚 竜ヶ池觀音堂塚群 小兒石遺跡 丘陵斜面 杉谷H遺跡 黒川上山古墓群 台地 千古塚遺跡 上野遺跡 平野 柳田古墓 宝積寺遺跡	丘陵斜面 坂本山中世墓 大王山遺跡 日野大谷遺跡Ⅲ区中段 椎山中世墓 輕海中世墓 黒川上山古墓群 阿弥陀瓶遺跡東地区 堂坂遺跡 普正寺遺跡 堀I遺跡 白山橋遺跡	VI b 土塚墓・群集 丘陵斜面 敷田薬師中世墳墓 矢駄遺跡 地頭町中世墓 脇方横穴墓群 五十里洞穴中世墓 VI b 地下式塚 丘陵斜面 山園町遺跡 敷地天神山遺跡群 台地 津波倉ホットジ遺跡 刈安野々宮遺跡 VI c 古墳墳丘を再利用 丘陵斜面 日野大谷遺跡Ⅲ区中段 椎山中世墓 平野 法圓寺中世墓	丘陵尾根 細口源田山遺跡 竜ヶ池觀音堂塚群 岡本古墓群B・D地区 小兒石遺跡 阿弥陀瓶遺跡西地区 一の谷中世墳墓群 白谷岡ノ城北遺跡 白山町遺跡 三貫梨遺跡 尾野内遺跡 西岩野遺跡 塚崎中世遺跡 大歓遺跡 宝積寺遺跡
II c 塚墓・一区画に複数埋葬	丘陵尾根 韋馱天山遺跡 竜ヶ池觀音堂塚群 台地 千古塚遺跡 妻波古墓 平野 細崎遺跡 宝積寺遺跡	III b 配石墓・区画に複数埋葬 丘陵斜面 日野大谷遺跡Ⅲ区中段 椎山中世墓 平野 法圓寺中世墓	VI c 古墳墳丘を再利用 丘陵尾根 下開發茶臼山遺跡 小坂經塚 中山2号中世墓	

第3表 分類別墓地立地状況



第16図 形態分類別墓地検出例（※全て各々の発掘調査報告書より転載）

I. 医王山香城寺造跡北尾根、IIa. 鹿田古墓、IIc. 妻波古墓、IIIa. 医王山香城寺造跡南尾根
IIIb. 黒川上山古墓群、IIIc. 法圓寺中世墓、V-Wb. 細口源田山造跡、VIa. 三木だいもん造跡

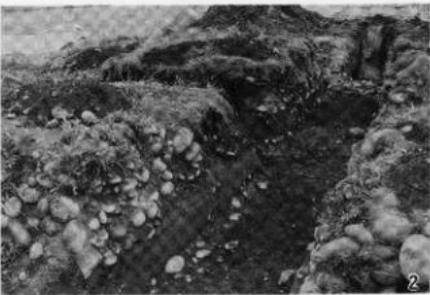
墓地名	県名	造墓年代	立地	外觀形態	辦法	備考	測定年代	立地	外部形態	辦法	備考
飯田東山中世墳群	長野	13C~16C	丘陵斜面	V a	火葬	石室下に火葬骨壺	前川14C前~中頃	平野	N	火葬	遺骨器(珠)
明泉寺中世墳群	福井	15C	*	V b	火葬	石室下に火葬骨壺	14C~15C	丘陵斜面	V a	火葬	火葬骨器(珠)
佐久間山遺跡	滋賀	13C後半~14C	台地	V a	土葬	直葬?	14C	丘陵斜面	V a	火葬	石室下に火葬骨壺
白谷洞ノ塚北遺跡	滋賀	15C~16C	火葬	V a	火葬	火葬骨壺納穴?	14C	丘陵斜面(箱)	V a	火葬	水棺(火葬骨)、直葬
医王山・若宮遺跡	滋賀	12C後半~13C中期	丘陵斜面	V a	火葬	火葬骨壺	14C後半~15C前半	丘陵斜面	V b	火葬	火葬骨器(珠)
* 香林寺中世遺跡	滋賀	13C後半~14C	丘陵斜面	V a	火葬	火葬骨壺	15C後半~16C前半	丘陵斜面	V b	火葬	火葬骨器(珠)
鬼頭明慶堂遺跡	滋賀	13C初め	平野	V a	土葬	木棺	15C~16C前半	丘陵斜面	V b	火葬	火葬骨器(珠)
徳島山遺跡	滋賀	14C後半~15C代	丘陵斜面	V a	火葬	火葬骨壺	13C後半	丘陵斜面	V a	土葬	木棺
柏谷H遺跡	滋賀	中世	丘陵斜面	V a	火葬	火葬骨器(珠)、瓦(火葬骨)	15C後半	丘陵斜面	V b	火葬	火葬骨器(珠)、火葬骨壺
上野遺跡	滋賀	中世	台地	V a	火葬	火葬骨器(珠)、瓦(火葬骨)	14~15C前半	台地	V a, b	火葬	火葬骨器(珠)
古倉A遺跡	滋賀	13C~14C	平野	V a	火葬	火葬骨壺納穴?	15C前半~16C前半	台地	V a	火葬	火葬骨器(珠)、曲物?
吉倉B遺跡	滋賀	13C~14C	平野	V a	火葬	火葬骨壺納穴?	13C後半	丘陵斜面	V b	火葬	火棺?
柏谷古墓	滋賀	12C後半~13C中期	平野	V a	火葬	火葬骨壺	14C前半	丘陵斜面	V c	火葬	木棺
川上山古墓群	滋賀	12C末~14C前半	丘陵斜面	V a, b, c	火葬	火葬骨壺	12C末~13C代	丘陵斜面	V a	火葬	火葬骨器(珠)、瓦(火葬骨)
猪ノ塚	滋賀	14C前半~15C後半	平野	V b	火葬	火葬骨壺	13C前半	丘陵斜面	V b	火葬	火葬骨器(珠)
鬼頭天山遺跡	滋賀	14C後半~15C後半	丘陵斜面	V c	火葬	火葬骨壺	14C後半~15C代	丘陵斜面	V b	火葬	火葬骨器(珠)、瓦(火葬骨)
大遺跡	滋賀	15C	平野	V b	火葬	火葬骨壺納穴?	14C後半~15C	丘陵斜面	V c	火葬	火葬骨器(珠)
佐野原	滋賀	13C~14C	丘陵斜面	V a	土葬	豪華(珠)	15C後半	丘陵斜面	V b	火葬	豪華多種
三貫東遺跡	滋賀	15C前半~16C中期	台地	V b	土葬	豪華(珠)	14C中葉~15C	丘陵斜面	V b, c	火葬	豪華多種
蛇ヶ池越古代文化遺跡	滋賀	14C~15C前半	丘陵斜面	V a	火葬	火葬骨壺納穴?	13C中葉~16C後半	丘陵斜面	V a, b, c	火葬	火葬骨器(珠)、瓦(火葬骨)
尾野内遺跡	滋賀	15C前半~16C中期	台地	V a	火葬	火葬骨壺納穴?	13C中葉~16C後半	丘陵斜面	V b	火葬	火葬骨器(珠)、瓦(火葬骨)
小見石遺跡	滋賀	12C末~16C	丘陵斜面	V b	火葬	火葬骨壺納穴?	13C中葉~16C後半	丘陵斜面	V a	火葬	火葬骨器(珠)、瓦(火葬骨)
千吉家遺跡	滋賀	14C~15C	台地	V a, b, c	火葬	火葬骨壺納穴?	13C後半	丘陵斜面	V a, b, c	火葬	火葬骨器(珠)
西谷野遺跡	滋賀	14C~16C後半	台地	V b, V a, b?	土葬	直葬?	15C後半~16C前半	丘陵斜面	V b	火葬	火葬骨器(珠)、瓦(火葬骨)
河代原	滋賀	12C後半~13C	平野	V a	火葬	火葬骨器(珠)	13C後半~14C前半	丘陵斜面	V a, b, c	火葬	火葬骨器(珠)、瓦(火葬骨)
宝積寺	滋賀	14C~17C	平野	V a, II, c, V b	火葬	V bは火葬骨壺納穴	15C後半~16C前半	丘陵斜面	V a, b, c	火葬	火葬骨器(珠)、瓦(火葬骨)
中山2号墳中世遺跡	滋賀	16C	丘陵斜面	V c	火葬	火葬骨壺	14C後半~15C後半	丘陵斜面	V b	火葬	火葬骨器(珠)、瓦(火葬骨)
金坂遺跡	滋賀	平安末~南北朝	丘陵斜面	V a, b	火葬	火葬骨壺	16C中葉~後半	台地	V c	火葬	石塔下に火葬骨壺

参考文献

- イ 石川県立埋蔵文化財センター1985『鶴来町白山遺跡・白山町墳墓遺跡(II)』
石川県立埋蔵文化財センター1986『劍崎遺跡』
石川県教育委員会1974『志賀町矢駄遺跡 横穴状造構の発掘』
石川考古学研究会1970『普正寺』
一宮市教育委員会1992「法圓寺中世墓」「愛知県一宮市市内遺跡発掘調査概要報告書——宮市文化財調査報告11」
石川県辰口町教育委員会1985『湯屋チョウヅカ遺跡』
石川県辰口町教育委員会1982『辰口町下開発茶臼山古墳群』
磐田市教育委員会1993『一の谷中世墳墓群遺跡』
- オ 小矢部市教育委員会1992『富山県小矢部市白谷岡ノ城北遺跡発掘調査概報』小矢部市埋蔵文化財調査報告書第34冊
大戸古窯跡群検討会・会津若松市教育委員会1992『東日本における古代・中世窯業の諸問題』
- カ 上市町教育委員会1995『富山県上市町黒川上山古墓群発掘調査概報』
加賀市教育委員会1987『三木だいもん遺跡』
- キ 京田良志1976『富山の石造物』富山文庫5
- ク 熊野神社稚児舞保存会1991『熊野神社稚児舞の由緯』
久保尚文1991『越中における中世信仰史の展開(増補)』桂書房
- コ 小松市教育委員会1973『経海中世墓跡群—発掘調査概報—』埋蔵文化財調査報告3
- サ 財団法人富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所1995『清水島II遺跡現地説明会資料』
財団法人富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所1994『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告(遺構編)』富山県文化振興財團埋蔵文化財発掘調査報告第五集
- ス 鈴鹿市教育委員会・鈴鹿市遺跡調査会1978「椎山中世墓」「三重用水加佐登調整池関係遺跡発掘調査報告」鈴鹿市埋蔵文化財調査報告IV
- タ 第13回埋蔵文化財研究会1983『各府県の様相』『古代・中世の墳墓について』
- チ 中世墓を考えるシンポジウム実行委員会1986『中世墓を考えるシンポジウム 資料』
- ツ 榊原町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所1977『大王山遺跡』
津市教育委員会1970『坂本山古墳群・坂本山中世墓群』津市埋蔵文化財調査報告2
- ト 富山県教育委員会1979『鏡甕山遺跡の調査—井波清玄寺所在中世墳墓発掘調査概報』
富山県教育委員会1975『富山県朝日町 柳田遺跡・柳田古墓緊急発掘調査概報』
富山県文化研究会1975『杉谷II遺跡』『富山市杉谷(A・G・H)遺跡 発掘調査報告書』
富来町史編纂委員会1976『地頭町中世墳墓窟』『富来町史 総資料編』
- ナ 七尾市教育委員会1982『細口源田山遺跡』
植崎彰一1986『越前名陶展』福井県陶芸館
- ニ 奈良大学文学部考古学研究室1985『妻波古墓発掘調査報告書』奈良大学考古学研究室調査報告書 第11集
- ヒ 水見市教育委員会・富山県砂防課1985『富山県水見市 藪田集郷中世墓発掘調査報告書』
- ホ 北陸中世土器研究会1992『中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器』
北陸中世土器研究会1994『中世北陸の寺院と墓地』
- フ 姫中町1967・1996『姫中町史』
姫中町教育委員会1995『富山県姫中町中名II遺跡発掘調査報告』
- 福光町教育委員会1994『医王は語る—医王山文化調査報告—』福光町・医王山文化調査委員会
- ヘ 凡平社1988『古伊万里』別冊太陽63号
- ミ 宮下幸夫・小林茂・上野与一1978『小松市津波倉ホットジ遺跡』『石川考古学研究会会誌 第21号』石川考古学研究会
- ヨ 吉岡康暢1989『珠洲の名陶』珠洲焼資料館
吉岡康暢1991『北東日本海域における中世陶磁の流通』『国立歴史民族博物館研究報告 第19集』



図版1 1.周辺の航空写真 2.堤状造構(南西から) 3.同(南東から)
4-6.石造物



図版2 1. 塚状遺構Bセキ(北西から) 2. 同Aセキ(南西から) 3・4. 同藏骨器出土状況 5. 塚状遺構及び道(南から)
6. 道(西から) 7. 同石散検出状況(南から) 8. 同(西から)



1



2



3

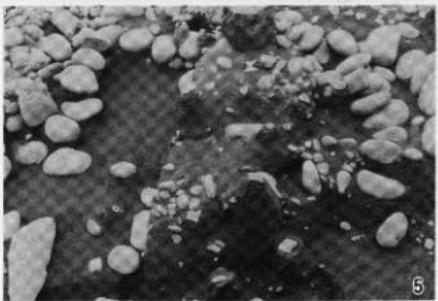


4



5

図版3 1. 塚状構造及び道(南から) 2. 旧河道Gセク層序(南西から) 3. Kセク層序(西から)
4. 調査区全景(北から) 5. 同(東から)



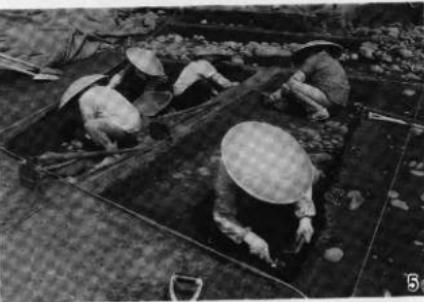
図版4 1. SD01検出状況(北から) 2. 同完掘状況(北から) 3. 墓I検出状況(南から)
4. 同(南から) 5. 墓II検出状況(東から) 6. 同(東から)



1



4



5



6



7



2



8

図版5 1. 石列検出状況(南から) 2. 旧河造検出状況(北から) 3. 同及び試掘トレンチ層序(北から) 4~7. 作業風景



1



35



3



2



7



6



10



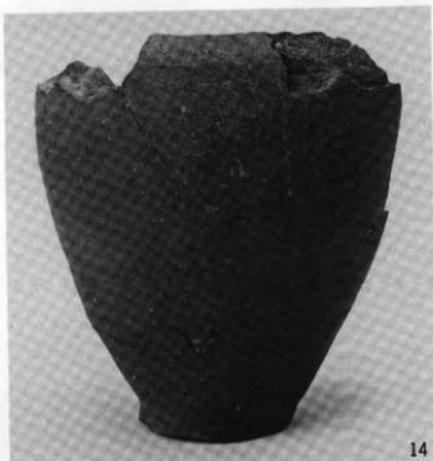
38

図版6 出土遺物 (1/3)

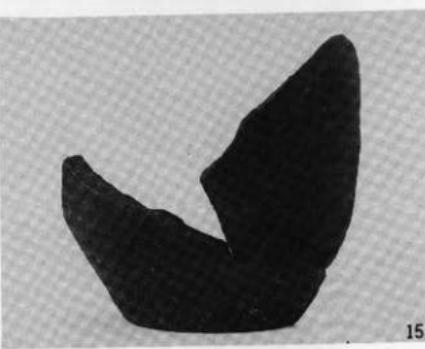
*数字は実測番号



37



14



15



13



24

図版7 出土遺物 (1/3)

※数字は実測番号

11

12

8

4

32

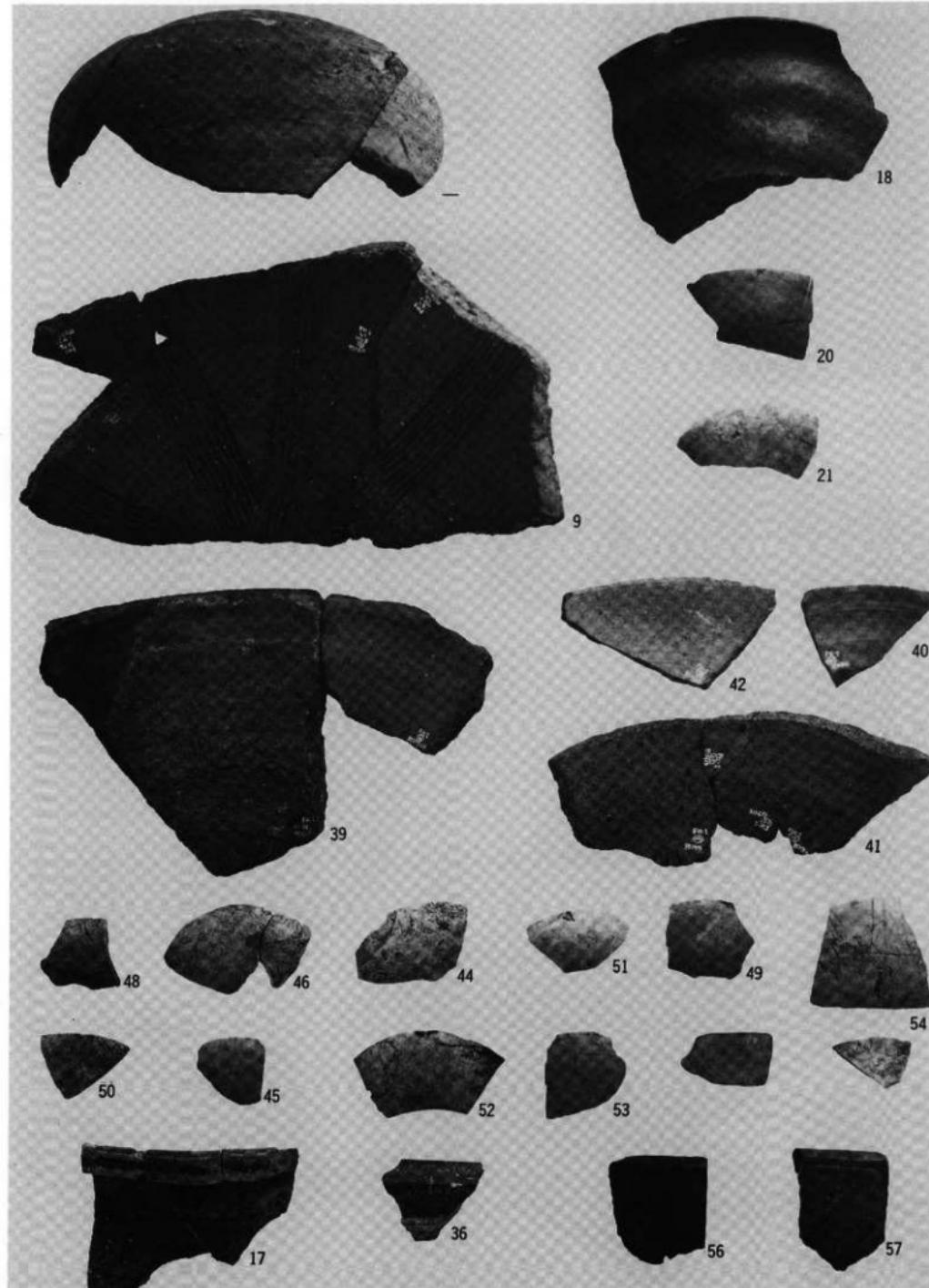
5



図版8 出土遺物 (1/2)

※数字は実測





図版10 出土遺物 (1/2)

*数字は実測値

報告書抄録

ふりがな	ほりいちら いせき はくつちょう さ ほうこく
書名	堀 I 遺跡発掘調査報告
シリーズ名	県営公害防除特別土地改良事業に係る埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告
シリーズ番号	(2)
編集者名	片岡英子
編集機関	婦中町教育委員会
所在地	〒939-27 富山県婦負郡婦中町速星754 TEL 0764-65-2111
発行機関	婦中町教育委員会
所在地	〒939-27 富山県婦負郡婦中町速星754 TEL 0764-65-2111
発行年月日	西暦1996年3月29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
堀 I 遺跡	富山県婦負郡 婦中町堀字立寺町	016362	113	36°38'08"	137°10'02"	試掘調査 950511 ~950609 本調査 950717 ~951012	試掘調査 対象面積 100m ² 本調査 対象面積 83m ²	県営公害 防除特別 土地改良 事業に係 る事前調 査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
堀 I 遺跡	墓 塚状遺構	中世 近世	配石墓 5基 溝 1条 石列 1基 塚状遺構 1基	珠洲焼、八尾焼、瀬戸焼、 越前焼、中世土師器、土 製品、伊万里焼、丸山焼、 硯、骨片	

平成8年3月29日発行

富山県婦中町 堀 I 遺跡発掘調査報告

編集 婦中町教育委員会
 発行 婦中町教育委員会
 富山県婦負郡婦中町速星754
 印刷 株式会社ニッセイ